ハイスクールD×D　　蠍の毒

損長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハイスクールＤ×Ｄ　蠍の毒

【Ｎコード】
Ｎ２５５５Ｖ

【作者名】
損長

【あらすじ】
私立駒王学園には赤髪で有名な生徒が２人いる。１人は成績優秀、眉目秀麗、ナイスバディの３拍子が揃う地毛が燃えるように紅い髪をしたリアス・グレモリー。もう１人は喧嘩上等、悪鬼羅刹、『将来絶対アッチの人になるよね』と噂されている血のように染められた朱い髪を持つ大空飛鳥。そんな少年には人に言えないある秘密があった。これはそんな少年にまつわる、破天荒な物語。

始まりはいつも日常から（前書き）

ま～たやったよ、ココの作者。

大きな休みに入ると何か新しい物が書きたくなる性分なのかもしれません。アニメが放送される前に書いておこうと思って書きました。

では、どうぞ。

始まりはいつも日常から

「おいこらぁ！今日こそケリ付けさせてもらうぞ！！」
「俺の弟が世話になった様じゃねぇか。ちょいと面貸しな？」
「死にさらせえぇえぇえぇえ！！！」

治安が別段悪いわけではない、むしろ良いこの街には不釣り合いな罵詈雑言が飛び交う。
しかもこの声はある1人の人物に向けての言葉だ。
それは…

「だ――――！毎日毎日うっぜぇんだよ！！密集すんな、ザコ供！！！！」

私立駒王学園、2年生の大空　飛鳥。彼への言葉である

ツンツンと逆立っている染められた赤髪。
サングラスをかけていても隠し切れていない左目の大きな傷。
ブレザーを着ずに着崩したシャツと柄物のTシャツ、下は普通と思ったら鋼鉄入りの靴。

まさに『不良』といった見てくれである。

「あぁ！？誰がザ（ドゴッ！）こぺ！？？」
「知っているよな？俺のおと（ゴキッ！）うげっ！？？」
「てりゃあぁあああぁああ（バゴッ！）あおぅふ！？？」

ドゴッ　バキッ　ドカドカ　ボキン

「ちっ、手間かけさせやがって。面倒だからもう来んじゃねぇぞ」

ものの数分で3集団の不良を鎮圧させた飛鳥はその場を後にする。
『鬼子の飛鳥』『赤鬼』『赤い死〇星』などの呼び名が付くほどの不良である彼。
その噂は隣町まで広まっており、昔の恨みや腕試し、他にも彼の名前を借りた犯行への報復などが彼に降りかかっている。
１９０ｃｍという長身に加えて派手な見た目。
さらに腕っ節が強い為ケンカが絶える事は無い。
そんな彼には似合わない、ある秘密がある。
それは…

（び、ビビったぁぁあぁぁあ！！！）

極度のビビりで、接触恐怖症なのだ。

（なんなんだよあいつら！一気に3組は流石に卑怯だろうが！！もっとモラルを持ってケンカしろよ！！！）

彼はそんな考えを隠すために大股で歩き、眉間にしわを寄せて道を闊歩する。

彼の基本的な1日のスケジュールは大体こうなっている。

朝起きて学校に行き、授業を受けて家路に着く。
省略すると至って普通なのだが、素行不良や休み時間の間は寝ていたりして友達は1人もおらず、完全に浮いた存在となっている。

たまに聞こえて来るクラスメイトのエロ談義の声の大きさに苛つく事はあるが、自分から手を出した事はない。いちゃもんをつけられたケンカにたまたま勝ってしまい、報復などの様々な理由で彼の許に不良が集まって勝ったり負けたりしている内に、今の様な噂が流れるようになった。

閑話休題

そんな彼は今、学校が終わって家路についている途中であった。
彼の家は街のはずれにある、古びた教会だ。

「ただいまっと」

飛鳥は教会の裏にある宿舎へと入り、玄関に置いてある写真立てに声をかけた。
この写真に『行ってきます』と『ただいま』を言うのが彼の日課である。

手早く制服から部屋着に着替えると風呂桶にお湯を入れて夕食の準備に取り掛かった。
夕食と言っても一人暮らしの男料理なため、簡単な炒め物で済ましている。

夕食を終え、風呂に入っていつも通りの日常を過ごそうとしていたが、飛鳥は何か嫌な気配を感じた。

「…なんだ？教会、からか？」

窓から顔を出すと教会の明かりが付いていた。
名義上、教会も彼の所有物である為勝手に人が入った場合不法侵入となる。

夏になると子供達が肝試しをしていたり、盛ったカップルがイチャついていたりする事があるが、明りまで付ける者は今までいない。

「まったく、こんな夜中に誰だよ」

すぐに用事が済むと思い、サンダルを履いて教会へと向かう。
裏口から入り、人の気配がする聖堂の扉を開けて飛鳥は大声で罵っ

た。

「夜中に人ん家上がり込んでんじゃねぇ、コラァ！！」

勢いよく扉を開けると、彼の眼に移ったのは黒いローブを身に纏った集団。
ゾロゾロと蠢く集団を見て彼は一言口にした。

「うげっ、カルト宗教のヤツか？」

「ノンノンノン、俺達をあんな低俗な奴等と一緒にするなよ」

「あん？」

集団の中から出て来たのは、白髪の美少年。
神父みたいな恰好をしているがどこそこ弄っていてほとんど原形がない。神父と言うより、神父風のファッションをした少年にしか見えない。

「つーか、お前も何なの？でけぇ図体して上から失礼じゃない？そんなに上からチビを見降ろすのは気持ちが良いですか？ウドの大木様」

「ココは俺の敷地内にある教会だ。勝手に使ってんじゃねぇよ、ミジンコ」

「見た目通り体がデカい分脳がちいせぇみたいだな。お前が誰なのか聞いてんだよ。それ以外は口にすんな、口臭がきつい」

「お前等がスグにココを立ち去るってんなら教えてやってもいいぜ。電話代がもったいねぇからお前から電話しろよ。『このミジンコめにお名前を教えてください』ってな」

「あーあーあーあー、うっぜーよこいつ！！！もういい、死ね」

少年は懐から出した銃を飛鳥に向け、引き金を引いた。
その弾は火薬音もしない、光の弾丸だった。

始まりはいつも日常から（後書き）

次回は一旦、主人公のプロフィールについてまとめたいと思います。ネタバレになるので、読みたくなかったら飛ばしてもらっても構いません。原作1巻分が終われば読める位の内容にするつもりです。

では、また次回。

プロフィール（ネタバレあり）（前書き）

前回書いたように今回はプロフ（ネタバレ付き）でございます。

こうでもしないと置いてけぼり食らいそうな内容だし…

では、どうぞ。

プロフィール（ネタバレあり）

名前：大空飛鳥（おおぞら あすか）

年齢：１６歳

性格：喧嘩口調であるが内心ビビリの接触恐怖症
（人を蹴ったり敵意ある接触は大丈夫だが、不意、好意の接触には過敏に反応する）

誕生日：１１月１１日（さそり座）

所属：私立駒王学園　２年生

容姿：
顔は上の下で野性的。筋肉は付いているが１９０ｃｍの長身である為実際より細く見られがち。左目に大きな傷がありサングラスで隠しているが、隠し切れていない。ファッションはアロハシャツや甚兵衛（じんべえ）、ジャージと言った楽なモノを好むが、いつも両手に薄い黒生地のグローブを付けている。サンダル以外の靴には全て鋼鉄入り。

過去：
幼小児は神父と修道女の両親と一緒に暮らしていたが、彼が5歳の

時に2人共死去。原因不明の死だったが、彼は数日間うつろな目で『僕が殺した』と呟いていた。1年ほど親戚の家を転々としていたがドコも引き取らず、結局1人で教会に住む事となった。その頃から見てくれを悪くするようになり、接触恐怖症になる。（チキンは元々）

能力・神器：
『天蠍（てんかつ）の尾』またの名を『スカーレット・スピア』
右手で触った生物全ての動きを封じ生命力を奪う。接触時間が長いほど毒がまわって行き、最終的には血液の循環、心臓の動きまで止めてしまう。グローブなどの遮蔽物がある場合、能力は減退する。コントロールは未だ出来ないので、現時点では右手の吸収のみ発動。力が未熟な為、今は『制止』『吸収』の力しか発揮できない。また、幼少時にこの能力が暴走した為、あのような事件が起こった。

プロフィール（ネタバレあり）（後書き）

まぁ、こんなもんですかね？

話や巻が進めばどんどん付け足して行くつもりです。
次回はちょっとしたバトル展開にする予定です。

では、また次回。

奇跡の力も、使い手によって黒にも白にも成り得る（前書き）

悪魔組が全然出ない。

まぁ、最初の方は堕天使組から入ったからしょうがないんですけどね。出来るだけ早く主人公組と絡ませたいな～。

では、どうぞ。

奇跡の力も、使い手によって黒にも白にも成り得る

ヤバい気がする。
ヤバい物が出て来た。
すぐに避けないとヤバい。
そんな曖昧な危険を察知した俺は反射的に横跳びに逃げた。

バキッ！　　バラバラ

横跳びをした後、俺がいた場所の後方から音がしたからそっちに目を向けるとまるで弾丸が通ったかのように弾痕が出来ていた。

おい、なんで発砲音がしてないのに壊れてんだよ？
ただの拳銃に見えるがサイレンサーでもついてんのか？
つーか、ウチの教会壊してんじゃねぇよ！！

「あぁ？な～に避けてくれちゃってんの？ウザいから早く殺されてくれない。悪魔殺す以外に力使うのもったい無いんですけど～」

「悪魔殺すって、頭に蛆虫でも湧いてんのか？そんな存在がこの21世紀にいると思ってるわけ？ヤブ医者がやってる精神科でも教えてやろうか」

「はっ！脳外科が必要なデカ物なんかに教えてもらう必要なんてねぇよ、ヴァ～カ。目障りだから3回死ね」

来るっ！！

バキッ！　バキッ！！　バキッ！！！

再び迫った危機を察知して跳んで避ける。
その際にやはり発砲音が聞こえない。ちっ、銃口だけで見極めんのはやりにくい。

「お～、避ける避ける。もう1発で仕留めるよりもお前の狂った様なダンス見る方が面白そうだ」

「はっ！勝手にほざいてろ、ノーコン野郎！」

とは言ったものの、ずっと避けれる自信は一握りも無い。

他の奴等も追い出さないといけねぇってのに、こいつ1人だけに構ってられん！
一気に決める！！

俺は履いて来たサンダルを脱ぎ、足の指に力を入れる。
喰らえ！ガキの頃から（逃げ足で）鍛え上げた俺の脚力を！！！

ドンッ！

「はぁ！？消え――」

「もら――（ドスッ）――は？」

「――な～んてね。どうだった、ハリウッドもびっくりな俺の迫真の演技？」

完全に後ろを取ったと思ったのは俺の妄想。
このクソ野郎は全部見えていた上で反撃して来た。しかも下手な小芝居まで打てるくらい余裕だって事だ。

俺の腹には深々とあいつの剣が刺さっている。
しかも普通の剣なんかじゃなくて刀身がありえないくらいに発光している。夏祭りとかの出店にある蛍光ライトなんかの比じゃない。

ズルッ　　ドサッ

躊躇なく引き抜かれた剣には俺の血がべっとりと付いていて、それ

を見た俺は床に倒れた。
なんだこれ？ありえねぇ位に痛ぇ！！
傷口が燃えるように熱いくせに体の端からどんどん冷たくなって行く。
痛みを叫んだり助けを呼ぼうにも、なぜか口に空気が流れない。
死ぬのか、俺？
ふざけんな！こんな歳で死ねるか！！
ココで死んだら、親父とお袋に会わせる顔がねぇ！！！

「何をしているの、フリード」

「あ、レイナーレ様。いえね、このクソデカい汚物が俺に突っかかって来たから俺の聖剣でブスーッと返り討ちにしたんでごぜ～ますよ」

誰だ？女、こいつの上司か？
と言うか、誰が汚物だ、この便所虫！！
不法侵入しといてぬかしてんじゃねぇ！！

「あら、まだ生きているわね」

「おろ？しぶといな～。デカい分神経が鈍いのか？ほんじゃ最後はちっちゃい脳みそをクリーンヒットさせてバキュンと終わらせちゃうぞ～」

「待ちなさい。この男、見てくれは悪いけど一般人じゃない。バレるとは思わないけど、殺して悪魔にバレるのは面倒だわ。せっかくだからあの子の見張り役にでもしてちょうだい」

「えぇ～、マジで？うわ、こんなのと一緒にいなきゃいけないわけ？感動で教会をゲロまみれにしそう」

おい、俺をそっちのけにして勝手に話を進めんな！
もしゲロなんか吐いてみろ！てめぇの顔を雑巾代わりに使ってやる！！

「ん？なに？何か言いたそうだけどどうかした？暇つぶしに聞いてあげるよ」

「…く、くたばれ…。クソ虫…」

「お前がな♪」

ガスッ！！

「がはっ！？」

「うわぁ、血ついた。えんがちょ～」

この野郎…！わざわざ傷を狙って来るとはいい度胸じゃねぇか！！覚えてやがれよ…。

「あ？勝手に死なないでくれる？主人から殺すなって言われたんだから守ってもらわなくちゃ。ほら、早く治せよ、クソガキ」

「あ、はい！」

…なんだ？
この野郎みたいに逆撫でするような雰囲気や、さっきの女のように高圧的な雰囲気じゃない、心が安らぐような雰囲気は…？腹の痛みが消えて行く。

暖かい光に包まれて、俺は安らかに眠った。

「ん…、ココは…、俺の部屋？」

「あ、おはようございます。気付きました？」

「おわっ！？だ、誰だお前は！！」

朝の光が目に入り込んだ事で反射的に目を覚ますと、ベッドの横に見覚えのない金髪の美少女が座っていた。

驚かすんじゃねぇよ！俺のチキン具合をなめんな。

と言うか、本当に誰だ！？

小柄で金髪、翡翠色の眼を持つ修道女なんてここらへんじゃ見た事なんて…、この雰囲気、もしかして…。

「まさかとは思うが…、傷を治したのはお前か？」

「はい、アーシア・アルジェントって言います。アーシアと呼んでください」

「…俺の名前は大空飛鳥。好きに呼べ。傷を治したって言ったが、本当なのか？昨日の痛みは覚えているが、傷跡が少しも見当たらね

え」

「はい、それが私の能力なので」

能力？何を言っているんだ、この子供は。
まさかこいつ、俺と同じように変な力を持っているのか？

「あ、あの…」

と言うより、そもそも何でこんな子供があんな集団にいたんだ？
こいつもあいつ等の仲間？

「もしも～し…」

それにしては雰囲気が違い過ぎる。
あいつ等が黒とするとこいつだけ白く、全くと言って染まっていない。
なんなんだ、こいつとあのカルト集団の関係は？

「す、すいません！！」

「おわぁ！？な、なんだ、いきなり大声なんか出しやがって！！」

「あぅ、す、すみません…。でも、何回も声を掛けたんですけど応えてもらえなくて…」

「う、そ、それはすまん…。で、一体何の用だ？」

「えと、街を案内してくれませんか？」

はぁ？

奇跡の力も、使い手によって黒にも白にも成り得る（後書き）

アーシアが出て来ました。
最初に言っておきますが、アーシアは飛鳥とイチャコラする予定はありません。やっぱりアーシアはイッセーをリリス嬢と一緒に愛し合っていればいいと思います。

次回は我等が主人公、エロの権化、最低辺からの下克上悪魔、兵藤一誠の登場です。どうなる事やら。

では、また次回。

男子高校生は馬鹿とエロの権化である（前書き）

なんだよ、このタイトル！

結構真面目な感じで書いて来ていたはずなのに変な題名を付ける事になってしまいましたよ。それもこれもあいつのせいだ！

では、どうぞ。

男子高校生は馬鹿とエロの権化である

「あの、あの建物は何ですか？」

「スーパー。まだタイムセールじゃないから入るなら後にしろ」

「それじゃあアレは？」

「交番。普段はおとなしいが、面倒な時に限って追尾能力が格段に上がる犬の溜まり場だ」

「あの大きくてピカピカ光っているのは？」

「パチンコ。金を無削除に食い荒らす廃人の行き着く果ての場所」

などと適当な事を言いながら、アーシアの散歩の付き添いをする俺。

アーシアは行く先々で目についた建物について聞いて来る。

日本語があまり得意じゃないと言っていたが、看板が読めなくても見た目で分かる物もいくつかあった。もしかしてドが付くほどの田舎から来たのか、こいつ？

つーか、無闇にはしゃぐな。

お前がはしゃぐと一緒にいる俺も目立っちまうだろうが！

普段は視線を感じても『近寄りたくない』と言った物がほとんど。だが今はいつもと違ってはしゃぎまくるアーシアがいる。その所為で不良の俺がなんで金髪美少女と一緒にいるのか好奇心をかられて見て来る奴がいるのだ。

ちくしょう…、こんな事なら断っておけばよかった…。どうしてこうなったんだ…。

＜数時間前＞

「すまんが、何で俺が、お前を、案内せんといかん？」

「えと、レイナーレ様から昼間の間だけなら街を見て回ってもいいとお許しを得たので。あ、レイナーレ様って言うのはだて…じゃなくて！あの、その、上司、そう！上司です！教会の上司なんです！！」

……なんというか、可哀そうなくらいに嘘が付けない子だって事は分かった。

手足をバタバタさせながら誤魔化そうとしていて、悪い事をしていないのに罪悪感が生まれる。…不良が何言ってんだ、おい。

つーか、教会関係者って言うのは明らかに嘘だ。
お払いや祈りをささげる時の儀式用に剣を使う所は何度も見た事はあるが、いくら外国人だからと言って銃や剣で人を襲っていいわけがない。

だがここで嘘を言及しても仕方がない。
アーシアが本当の事を言ってあいつ等の正体が分かっても太刀打ちできるレベルの相手じゃないって事は身にしみるほど理解している。
ここは大人しくしておくしかないな。

「はぁ、案内するのは別にいいが…」

「…だからレイナーレ様は私の上の上の、そのまた上の上司でして、って、えぇ!?い、いいんですか!?」

「話は最後まで聞け。案内するのはいいが、学校が終わった3時からだ。こんな見てくれでもまじめに学校に通っているんだよ」

見た目や素行は悪いが、これでも皆勤賞で赤点なんて取った事は無い。
ギリギリなんかではなく、ちゃんと平均点以上だ。

「学校、ですか?でももう昼ですよ?」

「はぁ？何言ってんだ。この通り時計はちゃん、と……じゅ、１２時いいいいい！？」

ベッドの横に置いてある時計を見ていると、針は短針長針どちらも１２の文字を指していた。

な、な、なんだとおぉぉおおぉお！！？

これまでにアラームが鳴っても寝てしまった事は何度もあったが、せいぜい８時前には起きる。なのに、なのに、何だこの時間はぁぁぁぁぁ！！！

もう『〇〇とも』が始まってる時間じゃないか！

昨日のあの怪我が予想以上にひどくてここまで眠りこけていたのか？

「あ、あの～、起こせばよかったですか？」

「え？あ、ん～、まぁ、この場合しょうがない。不可抗力だ。気にすんな」

「は、はぁ…」

なんとも歯切れの悪い返事だ。

子供と接した事なんてないからどうすればいいか分からんが、用は今の空気を壊せばいいはず。こいつの望みをかなえてやればいいだけだ。

「んじゃ、昼飯食ったら街に行くか。何か食いたいもんはあるか？」

「えぇ！？そ、そんないいですよ！私の事はお構いなく！！」

「1人分も2人分も差して変わんねぇよ。リクエストがないなら適当に作るぞ」

「えっと、じゃあ…、お、おまかせで」

「了解」

俺はベッドから降り、キッチンへと足を運ぶ。
後ろからはアーシアがチョコチョコと追いかけて来た。

さて、修道女でも食えそうなもんでも作るか。

＜現在＞

あ～、過去の俺を全力で蹴りたい。
料理を褒められたからって有頂天になり過ぎたわ、マジで。

（ちなみに今日の昼食はホウレン草とツナ、シメジを具に醤油ベースで味付けをしたスパゲッティ。アーシアは『初めての味ですけど、すごくおいしいです！』と完食した）

「アスカさん！あれはなんですか？」

「あ？駒王学園じゃねぇか。いつの間にか此処まで来てたのか」

「くおんがくえん？」

「あ～、それはあの建物の名前で簡単に言うと学校だ」

「学校…」

…またか。

さっきからたまに顔を見せるこいつのさびしげな感情。
幸せそうな親子とか綺麗に並べられたショーケースなんかをこんな目で見ていた。
…はぁ、俺もお人よしなんかねぇ。

「近くで見るか？」

「え？」

「流石に部外者が入ると後々面倒だが、近くで見るくらいなら良いだろう。ほら、行って来いよ」

「は、はい！！」

俺からの許しを得たアーシアはすぐさま学園に向かって走りだした。
まったく、子供はわかりやす――

ボスン

「はわう！」

「…だ、だいじょうぶっスか？」

ん？何かあったか？

一瞬目を外している内にアーシアが学園の生徒とぶつかったらしい。
たく、嬉しいのは分かるがちゃんと前を見て歩け。

「あうぅ。すみません、急いでたので」

「何やってんだ、お前は。さっさと立てよ」

「おい、そういう言い方はねぇだろ！ってアレ？お前同じクラスの…」

あぁ？
ぶつかった男子生徒は俺に見覚えがあったらしく、俺もそいつを見覚えがあった。

たしか…

「同じクラスのエッロー？」

「違うわぁ！兵藤一誠でイッセー！！断じてエッローなんてあだ名

じゃない！！！」

「あ～、そうだそうだ。たしかそんな名前だったわ」

「あの、お知合いなんですか？」

「クラスメート。話した事は無いけど何かと有名だったから覚えてんだよ」

こいつ、兵藤一誠は俺と違った方向性で悪い噂を独占していた。

エロい、とにかくエロい。

エロい事に関する噂には絶対と言っていいほどこいつの名前が入っている。たしか隣町からケンカしに来たやつも知っていたらしいし、そちら方面では有名なのだろう。

「へ～、皆さんに知られている人気者なんですね～」

「い、いや～。人気者ってわけでもないけど、まぁ、それなりにかな～」

…だらしない顔してんな～。

まぁ、アーシアはどっからどう見ても美少女だし、そんな子から褒められたりすれば大抵の男はあんな顔になるだろう。

ちなみに俺の場合、美女だろうがブサイクだろうが対応は変わらない。人と話すなんてスッゲー緊張するじゃん。表情なんて作れるか。

「つか大空、お前この子とどういう関係なんだ？まさか彼女とかいうなよ？（クワッ）」

「瞳孔開けてまでこっち見んな。昨日うちの近くにこいつが越して来てな、街を案内してくれって言われたからしてるだけだ」

「え？ちが――」

「そうだろ？」

「そ、そうです！そうなんです！！」

流石に教会を乗っ取られたなんて言えないし、表向きはこんな理由でいいだろう。

それよりこいつ、よく俺に対して普通に話せるな。
もうこの街の住人は俺にそうそう話し掛けないんだが。

「あ、血…」

「ん？あ、ホントだ。さっきぶつかった時に切ったのか？」

アーシアの目線を追うとイッセーの手が怪我していた。
大怪我と言う訳ではないが、擦り傷にしては出血量が多い。

近くの公園にある水道場で消毒させようとしたが、アーシアが兵藤の手を握った。

って、へ？

「ちょちょ、ちょっと！？血付いて汚いから握ったらダメ！」

「そう言いながら顔ニヤけてんぞ」

「うっさい！こんな美少女に握られたら誰だって…って、あれ？」

「ん？っ！？」

兵藤が変な顔をしたのを見てその視線の先を見て、俺も驚いた。
アーシアの手から淡い緑色の光が発せられ、照らされた怪我がみるみる治っていく。

何だあれは！？
これが昼にこいつが言っていた能力なのか？俺の腹の穴を治したの

もこの能力？

色々考えを巡らせていると光が納まり、怪我は跡形もなく消えていた。

「はい、傷は無くなりましたよ。もう大丈夫」

「…その力……」

「はい。治癒の力です。神様からいただいた素敵なモノなんですよ」

治療を終えたアーシアの顔はどこか寂しげなものだった。

バカ丸出しだった兵藤も流石にこの状況に混乱している。

…ここら辺が潮時か。

事態が面倒になる前に、俺は水を注す事にした。

「おい、もう日が暮れるから帰るぞ」

「あ、はい！今行きます！それじゃあ、私はこれで」

「え、あ、ちょっと待って！えっと、君、名前なに？」

「アーシア・アルジェントと言います。アーシアと呼んでください

！」

「怪我治してくれてありがとうな、アーシア。また会おうぜ！」

「はい！イッセーさん、必ずまた会いましょう！」

ぺこりとあいつに一礼して小走りで俺の後ろに着くアーシア。
その表情は少しだけだが暖かい色が含まれていた。

ふ～ん、馬鹿は馬鹿なりに役立つんだな。
…アイツくらいなら話しかけてもビビらないかな？

そんな事を考えながら見慣れた教会へと歩を進めた。

男子高校生は馬鹿とエロの権化である（後書き）

ほぼ初対面だったので会話がうまく繋げませんでした。
まぁ、話が進めば漫才チックにしていきたいなと思います。

さて、これから悪魔組がジワジワと関わっていきます。

では、また次回。

この世に『絶対』正しい定理など存在しない（前書き）

学者にケンカ売ってるサブタイだわ、マジで。

まぁ、時の運とかその場の状況とか、それら全てを覆すような『奇跡』や『偶然』はこの世に溢れていますから、『絶対』はないんです。

…何言いたいんだ、ワシ？

では、どうぞ。

この世に『絶対』正しい定理など存在しない

「『お勤め』に行くからパッパと準備しちゃいな。ウスノロ」

「はぁ？何で俺も行かなきゃいけないんだよ、若白髪」

アーシアに街を案内した翌日、学園から帰って半強制的にカルト集団の晩飯を作らされた後、フリードからそんな事を言われた。

つーか、何で俺がお前等の『お勤め』なんぞに出ないといかん。

「おいおい、なんか勘違いしているようだけどお前を連れて行くんじゃなくて、お前はあのロリっ娘（こ）のお守りに付いて来いって言ってんの。ドューユーアンダスタン？」

「流暢に日本語喋れる外国人が片言使ってんじゃねぇよ。腹立つ」

「はっ！国籍なんかカンケーね～んです～。俺は勝手気まま悪魔をぶっ殺す事だけを生業（なりわい）にしておるから他は全然興味なっしんぐ♪」

またか…。

こいつの厨二脳は正直うんざりする。

こんな風に頭がイっちゃってるヤツはまともに相手にしないのがいい。

実際こいつの方が強いし、大人しく従っておけばこいつ等もそれ以上言わない。

「あ～はいはい、分かりましたよ。付いて行きゃいいんだろ、付いて行きゃ」

「分かってんなら最初から反発しないでほしいな～。お前と話すとイライラしてカルシウムが欲しくなるんごぜーます」

「奇遇だな、俺もだ」

それだけ言って俺はエプロンを取って、ジャージに着替える為に部屋へと向かった。

『お勤め』と言うモノに付いて来たのだが、来た意味あんのか、これ？

来たのは極々普通な一軒家。
しかも家の中に入ったのは明らかに神父とは思えない風貌のフリード。
他の集団や俺とアーシアはすぐ近くにあるアパートの屋上でその様子を見ている。黒ローブの集団が何かブツブツ言っているけど無視しておこう。

本当にこれが『お務め』なのか？
まぁ、一応点いていた明かりが消えて蝋燭のような明かりが見えるから順調に進んでいるのだろうが、嫌な感じしかしない。

チキンが故に育てられた俺の勘は当たる事が多い。
…悪い事に関してだが。

「あれ？あの、アスカさん…」

「どうした？ん、兵藤じゃねぇか。こんな夜中に何してんだ？」

アーシアが指した方を見ると、チャリを競輪選手並みの速さで走らせる兵藤の姿があった。
…なんで普通のチャリであんなスピードが出るんだよ。
そういう風には見えないが、ああ見えて何かスポーツでもやってんのか？
お、止まった。
急ブレーキをかけられたチャリが止まったのはフリードが『お務め』に入った家の前だった。もしかして、あそこがあいつの家なのか？
そう思ったが玄関での家に入る動きがぎこちない。
違うみたいだが何だ？さっきから嫌な汗が頬を撫でる。

「…変な事でも起きなきゃいいんだが」

「……っ！」

「って、おい！？ドコ行くんだ、アーシア！！」

俺が兵藤の動向に目を向けていると、アーシアがいきなり走り出して屋上から出て行った。

おいおい、いきなりどうしたんだよ！？
俺は捕まえる事なんて出来ないから追い付いても呼び止める事しか出来ないんだぞ！？

非常階段を駆け下りながら、アーシアを呼び掛ける。

「どうしたんだよ！いきなり逃げ出したりして！！」

「分かりません！でも、行かなきゃいけないんです！！」

っ！？…アーシアも何かを感じたのか？

…どうせ止めれないんだ。このまま俺もあの家に乗り込んでやる。

アイツの『お務め』なんて碌でもないものだろうし、邪魔してやる。

アーシアのスピードに合わせて家に付いた俺はこいつの前に立って玄関口に手をかける。

おいおい、ちゃんと鍵しとかないと危ないだろ？

そんな事を考えながらドアを開けると嗅ぎ慣れた臭いが鼻についた。

この鉄とは少し違う纏わりつくような臭いは…、血！？

しかもココからじゃなくて蝋燭の灯っている奥の部屋から臭って来る。

喧嘩で血の臭いが付く事はあったが、ココまで強い臭いは初めてだ。

何が起こっているんだよ、この家で！？

「ぐあぁぁ！」

「この声は！？」

「イッセーさん！？」

奥の部屋から聞こえて来た兵藤の悲鳴。
その声が聞こえた瞬間に俺達は駆けだす。
そして部屋の中を見ると跪(ひざまず)いた兵藤に銃を向けるフリードの姿があった。
このクソ野郎！！

「やめてください！」

「ふっ！」

ガキィン！

アーシアが大声でフリードの動きを止め、俺が呼吸音と共に蹴りを繰り出す。
ちっ！あの野郎、咄嗟に銃で防ぎやがった！

「アーシア！それに大空！？」

「おんや、なーんでお前たちこの家に入ってるわけ？あいつらまだ結界張り終わって無いわけ？うっわ、つっかえな～い」

「はぁ？何言って――っ！？」

「！　い、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

この2人に気を取られてさっきまで気付かなかったが、壁にありえないモノがあった。

そこに在ったのは逆十字に張り付けられた男の死体。

デカい釘、いや、杭と言ってもいいだろう。その杭が四肢と心臓に深々と刺されている。しかも体中に切り傷があり、傷口から臓物がただれていた。

あの臭いの正体はこれか！？

碌でもないとかそういう次元じゃねぇ…、狂ってやがる！！

「おい…、何なんだよこれ…」

「あはははは。お前はムカつくけどアーシアちゃんの可愛い悲鳴を聞いて僕チンは機嫌いいから教えてあげる。コレは悪魔に魅入られ

たダメ人間さんの行く末なんですよ～」

「ふざけんな！お前の腐った脳内設定はどうだっていいんだ！！悪魔がどうとか言ってねぇで本当の事を言いやがれ！！！」

「あ～も～、コレだからおつむの弱い馬鹿は大っ嫌いなんだよね～。この世には悪魔が普通にいるんだよ、そこで跪いているバカ面くんもその１人」

…は？

こいつは今何て言った？
バカ面って言うのは兵藤の事だよな？兵藤がなんだって？

悪魔？

っ、惑わされんな！
こいつの言動に惑わされんな！！

なんとか混乱する頭を正常に戻そうとしていると、アーシアが何かを呟きだした。

「……フリード神父、……その人は…」

「人？違う違う。こいつはクソの悪魔くんだよ。ハハハ、何を勘違いしているのかな？」

「……イッセーさんが、……悪魔？」

「っ……」

アーシアの呆然とした目線を見て兵藤はすぐに目線をそらす。

なんだよ、その反応…。

まさか本当に、悪魔だって言うのかよ！？

「なになに？キミら知り合い？わーお、これは驚き大革命！悪魔とシスターの許されざる恋とかそういうの？マジ？マジ？」

相当気に入ったのか、嫌な笑みを浮かべながら兵藤とアーシアを交互に見ながらフリードがはしゃぐ。

…エロいっていう噂はよく聞いたが、俺みたいな悪い噂は１つも聞いた事がないコイツが悪魔？未だに信じられない。

「アハハ！悪魔と人間は相入れません！特に教会関係者と悪魔って

のは天敵さ！それに俺らは神にすら見放された異端の集まりですぜ？俺もアーシアたんも堕天使さまからのご加護がないと生きていけないハンパものですぞぉ？」

「堕天使だぁ？お前ら、俺ん家（ち）の教会を勝手に堕天宗教の拠点にしてたのか！？」

「あ～、そう言えばお前はレイナーレ様に会ってないんだっけ？良いじゃん別に。あの教会は堕天使が入れるくらいに神様の加護を無くしている、謂わば『抜け殻の教会』なんだから俺らがどう使おうったってお前には１ミクロンも関係な～い」

「人の敷地にズカズカ入り込んだ不法占拠者が言う事かよ？」

「んな事、弱いお前が悪いんだからしょうがないじゃん。まぁそれはいいとして、俺はこのクズ男さんを切らないとお仕事完了できないんで、ちょちょいとイきますかね？覚悟はＯＫ？」

フリードは視線を俺から兵藤に移すと見覚えのある剣を抜いた。

そう、俺の腹を深々と刺したあの光る剣だ。

まさかあいつ、兵藤にあの死体と同じ事をするつもりなのか！？

これ以上、俺の目の前で人を死なせてたまるか！！

そう思った瞬間、俺は足が動いて兵藤の前に立っていた。

しかもその隣には両腕を大きく広げたアーシアもいる。

この状況にあいつは見るからに嫌な表情をした。

「……マジですか～。キミら、自分達がなにしているのか分かってらっしゃるのでしょうかぁ？」

「知るか。俺は元々お前等と仲良くするつもりはねぇ。あるとすれば染まってないアーシアだけだ」

「…私は、もう嫌なんです。悪魔に魅入られたと言って、人間を裁いたり、悪魔を殺したりなんて、そんなの間違ってます！」

「はあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？バカこいてんじゃねぇよ！！お前等のように頭にウジが湧いてるヤツはただ従っていればいいんだ！！」

さっきまでの表情とは一変、憤怒の表情へと変わる。
おー、こわ。そんな表情も出来るんだな、お前。

「悪魔にだって、良い人はいます！」

「いねぇよ！バァァァァァァカ！！」

「わ、私もこの前までそう思っていました…。でも、イッセーさんはいい人です。悪魔だって分かってもそれは変わりません！人を殺

すなんて許せません！こんなの！こんなの主が許すわけがありません！」

…驚いた。

この数日で見た目に反して意外と行動力があるのは知っていたが、まさかこんな常人なら崩れそうな状況で此処までの啖呵（たんか）が切れるなんてな。

アーシアは強い。目の前にいるクソ野郎や俺なんかよりも、ずっと。っ！？やべぇ！！

バキッ！

「ぐっ！」

「アスカさん！？」

「大空！」

嫌な気配がして咄嗟に前に出たのが功を成した。

横から振られた拳銃のグリップを右腕で防ぐ事に成功したが、芯に当たってしばらく動きそうにない。まぁ、元々右手を使う気はない

が…。

それにしてもあのクソ神父、確実にアーシアを狙って来やがった。しかも本気で。

「…俺はお前の事も兵藤の事もあまり知らねぇが、これだけはハッキリと言える。この場で悪魔と言えるのはお前だ、ハゲ神父」

まぁ、その次は俺なんだがな。

フリードは相当イラついたのか、舌打ちを打つと同時にアーシアの髪を乱暴に掴み引き寄せる。

おい！何してんだ！

「…堕天使の姉さんからお前等を殺さないように念を押されているけどねぇ。ちょっとムカつきマックスざんすよ。殺さなきゃいいみたいなんで、ちょっとレ〇プまがいな事までしていいですかねぇ。あのデカブツには手足の爪剥ぐとか言う先人から受け継がれる拷問方法とかでいいか。そうでもしないと俺の傷心は癒えそうにないんでヤンスよ。と、その前にそちらのクズ丸くんを殺さないとダメダメですよねぇ」

フリードはアーシアを雑に投げ捨てると再度兵藤に剣を向ける。
ちっ！そうはさせるか！！
左腕を支えにして立った俺はフリードの方に向かおうとしたが、目の前の光景に目を見開いた。
なんと足を怪我した兵藤が立ち上がったのだ。
しかもファインティングポーズをとり闘う意思を露わにして。

「庇ってくれた女の子を前にして、逃げらんねぇよな。よっしゃ、こい！」

この際、俺の事を言わなかったのは別にいい。
それくらい、スッキリするほど気持ちの良い答えだったからだ。
だけどあいつ…、構えが全然体に染みついていない。
何となく取った行動なんだろうが、喧嘩慣れしていないのがバレバレだ。
あのレベルじゃフリードに敵(かな)わねぇ！

「え？え？マジ？マジ？俺と闘うの？死んじゃうよ？苦しんで死んじゃうよ？楽に殺すつもりなんて俺様にはないからね？さてさて、

どれぐらいの肉が細切れになるか世界記録に挑戦しましょうかね！」

まずい！

…ちっ！ココで使わなきゃ絶対後悔する！！

クソ野郎が飛び出すと同時に俺は右手のグローブを外そうとするが、

その瞬間に部屋が青白い光で埋め尽くされた。

この世に『絶対』正しい定理など存在しない（後書き）

ジワジワと原作に入り込んできましたよ～。

次回はオカ部の皆さん初登場です。

では、また次回。

部下は主の為に、主は部下の為に（前書き）

なんかね、堕天使サイドから始まったからしょうがない事なんだけど、主人公との絡みが少なくね？

はやく馬鹿やりたいな～。

では、どうぞ。

部下は主の為に、主は部下の為に

なんだ、この光は！？

咄嗟に両腕で顔面を覆い、急に光った青白い光で目を潰される事はなかった。

その発光源を探してみると床自体が光っていて、さらに言えば床に現れた幾何学的な模様から発せられていた。

これは、魔法陣か？

そんな事を考えていると、ＲＰＧとかでよく見るソレから何かが出て来る。

光が納まり恐る恐る見てみると、『出て来た何か』は俺がよく目にする格好をしていた。

と言うか、その格好は駒王学園の制服で『出て来た何か』はその学園に通う生徒たちだ。

…もしかして、こいつ等も悪魔なのか！？

「兵藤くん、助けに来たよ」

「あらあら。これは大変ですわね」

「…神父」

金髪の美少年に黒髪の美女、白髪の美少女と綺麗所ばかり。
会話の内容からすると兵藤の仲間のようだ。
…こんな時になんだが、兵藤がすごく浮いている。

「ひゃっほう！悪魔の団体さんに１撃目！」

っ！？しまった、出遅れた！
完全に意識が乱入者達に向かっていて、忘れていたフリードと言う存在が何の前触れも無しに斬りかかった。

ガギン！

だがその斬撃は金髪イケメンの剣によって阻止される。
緊迫した状況で俺の感覚が冴えわたり、ある事が分かった。
…アイツ、強いな。
しかもまだ本気を出していない。

「悪いね。彼は僕らの仲間でさ。こんな所でやられてもらう訳にもいかないんだ！」

「おーおー！悪魔のくせに仲間意識バリバリバリューですか？悪魔戦隊デビルレンジャー結集ですか？いいねぇ。熱いねぇ。萌えちゃうねぇ！なにかい？キミが攻めで彼は受けとか？そういう感じなのなの？」

うわぁ…。

こいつ、嫌なくらいテンション上がってやがる。
悪魔が複数現れた事でいいストレスのはけ口が出来たからか？
初対面の俺でも分かるくらいにイケメンも嫌悪感を露わにしている。

「…下品な口だ。とても神父とは思えない。いや、だからこそ『はぐれ悪魔祓(エクソシスト)い』をやっているわけか」

「あいあい！下品でござーますよ！サーセンね！だって、はぐれちゃったもん！追い出されちゃったもん！て言うか、ヴァチカンなんてクソ喰らえって気分だぜぃ！俺的に快楽悪魔狩りさえ気が向いたときに出来れば満足大満足なんだよ、これがな！」

「はぁ！？お前ちゃんと教会に属していたのか！？ずっと『自称』

か頭の痛いヤツと思ってた！！」

「はっはっはぁ！お前あとでゼッテーなぶり尽くしてやるから覚悟しとけぇ！！」

鍔迫り合いから一旦離れる両者。
片方は冷静に相手を捉え、もう一方はケタケタと不気味に笑う。

「1番厄介なタイプだね、君は。悪魔を狩る事だけが生き甲斐…。僕達にとって1番の有害だ」

「はぁぁぁぁぁ！？悪魔さまに言われたかないのよぉぉ？俺だって精一杯一生懸命今日を生きているの！てめぇら、糞虫みてぇな連中にどうこう言われる筋合いはねぇざんす！」

「悪魔だって、ルールはあります」

フリードの発言に苛立ったのか、ずっと兵藤の横に立っていた美人が言葉を切り返して来た。顔は微笑んでいるが、目線は鋭い。
敵意と戦意で満ちている、そんな視線だ。

「いいよ、その熱視線。お姉さん最高。俺を殺そうって想いが伝わってくる。これは恋？違うね。俺は思うよ。これは殺意！最高！これ最高！殺意を向けるのも向けられるのもたまらんね！」

「なら、消し飛ぶがいいわ」

兵藤の後ろから聞こえて来た声。
さっき確認できていなかったのか、もう1人いたようだ。

って、はぁ！？

俺はその声の主を見た瞬間、度肝を抜かれた。
なぜならそいつは俺と同じ朱い髪、いや、俺と似て非なる紅い髪を持ち学園から愛されている存在、リアス・グレモリーだったからだ。

まさか…、こいつもなのか！？

「イッセー、ゴメンなさいね。まさか、この依頼主の許に『はぐれ悪魔祓い』の者が訪れるなん計算外――っ！……イッセー、ケガしたの？」

「あ、すみません…。そ、その、撃たれちゃって…」

一瞬見開かれた目が細まり、イッセーと見つめる。

これを兵藤はバツが悪そうに眼をそらした。
なるほど、統括しているのはグレモリーなのか。
上に立つ者としては納得だが、あいつが悪魔だと言うのが未だに信じられない。
だがそんな考えは一瞬で変わった。
なぜなら兵藤からフリードに目を向けたグレモリーの表情が、これまでに見た事がないほど冷淡なモノだったからだ。
…これなら悪魔って言われても頷いちまいそうだ。

「私の可愛い下僕をかわいがってくれたみたいね？」

男の様に野太く、威圧感を与える声ではない。
だが発せられた彼女の声は低く、背筋を凍らす位に怖い声だった。
学園では見る事がない、彼女の一端を俺は知った。

「はいはい。かわいがってあげましたよぉ。本当は全身くまなくザクザク切り刻む予定でござんしたが、どうにも邪魔が入りまして、それは夢幻になってしまいましたぁ」

ボン！

フリードが言い終わるか否かの瞬間、いきなりそいつの後ろにある家具が爆ぜた。

俺は見た。

グレモリーの手から放たれた球体が家具を消し飛ばせたのを。

ハハハ…、ほんの数分で１６年築き上げた常識が壊れて行くよ…。

「私は、私の下僕を傷付ける輩を絶対許さない事にしているの。特にあなたのような下品極まりない者に自分の所有物を傷付けられる事は本当に我慢できないわ」

…言ってくれるねぇ。

言葉のチョイスが悪魔（ひと）を物と見ているようなモノばかりだが、それ以上に愛情と怒りを感じる言葉だった。

ぴくっ

殺気！？

しかも複数、外の奴らが動き出したか！？

「！　部長、この家に堕天使らしき者たちが複数近付いていますわ。このままでは、こちらが不利になります」

「……朱乃、イッセーを回収しだい、本拠地へ帰還するわ。ジャンプの用意を」

「はい」

黒髪美女も何かを感じ取ってのか、グレモリーに耳打ちする。

何か作戦でも思いついたのか？
ここからじゃ聞き取れねぇ。

「部長！アーシアと大空も一緒に！」

「無理よ。魔法陣を移動できるのは悪魔だけ。しかもこの魔法陣は私の眷属しかジャンプできないわ」

「そ、そんな…」

イッセーのデカい声でだいたい作戦内容は分かった。
あいつら来た時と同じように魔法陣を使ってこの場から退却するら

しい。

…たく、あの馬鹿。
アーシアだけじゃなくて俺も連れて行くつもりだったのか？
…馬鹿すぎて笑いが出るじゃねぇか。

「アーシア！大空！」

「イッセーさん。また、また会いましょう」

「アーシアの事は気にすんな！絶対無事に会わせてやる！」

言葉を交わした次の瞬間、さっきと同じように青白い光が部屋を埋め尽くす。
だが同時に、フリードも動き出した。
邪魔させるか！！

「逃がすかっ――――うぐっ！？」

「さっさと行けぇ！」

俺は突進するフリードの頭を右手で掴み、全力で床に叩きつける。
グローブをつけていても、少しは効果があるだろう。
その隙に光は消え、それと同時にあいつ等の姿も消える。
おし、逃げ切れたようだ――

ドガッ！

「ぐふっ！？」

「いつまでくっさい手を擦りつけてくれちゃってんの！？俺のキューティクルが台無しになんだろうが！！」

「アスカさん！」

「くっ…。なんだ…、育毛ケアでもしてんのか？若いのに大変だねぇ、ハゲ白髪」

「上等だよデカブツ。憂さ晴らしにお前の全身の毛と皮剃って晒してやんよ。その後にテメェの皮と肉でセルフウィンナーにして――」

「そこまでにしておきなさい、フリード」

「あぁ！？…ちっ、レイナーレ様かよ」

フリードに蹴りを喰らわされた後、並々ならぬ殺気を受けていたがある人物の一言で禍々しかった殺気が一気に沈んでいった。

そこに現れたのはロングヘアーの黒髪少女。

誰だ、アレは？

ん？レイナーレ様ってドコかで…。

っ！？まさか、こいつが堕天使か！？

「すいませんが止めねーでくれませんかねぇ、レイナーレ様。こちとら高まったテンションの捌け口がいなくなってムカっ腹立ってイラつき具合がハンパ無いんですよ。もうコレはこいつを殺さないと収まりませんねぇ」

「勝手に殺す事を許した覚えはないわよ。それに、その子を殺しちゃあなた絶対アーシアも殺しちゃうでしょ？彼はまだあなたのストッパーとして使えるわ」

「ちっ！！…こいつを殺すのは諦めますけど、その代わり憂さ晴らしに何人か使ってもよろしいざんすか？じゃなきゃ俺、あんたも殺しちゃいそうなんですよぉ」

「…いいわ、好きにしなさい。あなた達も早くこの家から出なさい。後処理が出来ないわ」

上から命令されて正直いい気はしないが、従うしか出来ないため渋

々と家から出る。
俺達と入れ替わって黒ローブが何人か家に入って行くが、そいつらが何をしているのかは見ずに教会へと帰った。
だが帰る途中、視界の端に見え隠れする光と背中にビリビリと響くサイレンの音が嫌に印象付いた。

部下は主の為に、主は部下の為に（後書き）

最後はぱっぱと終わらせてもらいました。
め、めんどくさかったからじゃないんだからね！

…おえっ。

自分に合わないキャラやると死にたくなる…。

では、また次回。

『悲しみ』があるから『楽しみ』がある。その逆も然り（前書き）

なんか長くなりそうだったので結構はしょったりした上に、話が全然進んでいません。

原作では結構スムーズに進む所なんだけどなぁ…。

では、どうぞ。

『悲しみ』があるから『楽しみ』がある。その逆も然り

ウロウロ　チョロチョロ

「……」

チョロチョロ　ウロウロ

「…おい」

「ひゃ、ひゃい！？」

「落ちつかねぇのは分かるが俺の周りでウロチョロするな。うっとおしい」

「あ、…はい」

俺の言葉にうなだれるアーシア。

俺も兵藤達の事が気になるが、『お勤め』があったのはもう昨日の事だ。もうそろそろ落ち着いて欲しい気持ちも生まれて来る。

はぁ…。

まったく、いくら落ちぶれた教会だからって堕天宗教の奴らが居着く様になるとは思わなかった。しかもアーシアから聞いた話、こいつら全員何らかの理由で教会から追い出された『はぐれ』の集まりだそうだ。もちろんアーシアも。

昨日の夜に説明された事を思い返し、その時にも感じた疑問がまた降りかかる。

…こいつのドコが『はぐれ』なんだ？

性格はフリードみたいに腐ってないし気性も荒いわけではない。オドオドしているが決して人見知りと言う訳でもなく誰とも話す。さらに見放されたはずの教会の作法に則り、毎日祈りをささげている。

聖職者の家に生まれた俺なんかよりもよっぽど神様に愛されるような存在だ。

一体何が原因なのかねぇ？

…

……

……考えてもしょうがねぇ、まず目の前の事からだ。

「アーシア、出るぞ」

「へ？出るって、ドコにですか？」

「町だよ。昼飯の材料買いに行くから荷物持つの手伝ってくれ」

「あ、はい！」

言い訳としてはこんなもんでいいだろ。
何処であいつ等が聞き耳立ててるか分かんねぇからな。

俺は気取られないように出来るだけいつも通りの厳つい表情で家から出た。

町に入り、目線だけで周りを確認する。

…よし、尾行されてる様子も気配もないな。
もう口を開いてもいいだろう。

「おい、アーシア」

「なんですか、アスカさん？献立決まったんですか？」

「違う。少し重要な話だ。こっちに来てくれ」

このまま話してもいいのだが、少し落ち着きたい為近くの公園に入りベンチに向かう。
途中、俺を見た奥様達がそそくさと子供を連れて逃げて行くのを見たが気にしない。俺にとっては当たり前の事で、話を聞かれたくないからむしろ好都合。
これで誰も公園に入って来ないだろう。
ん？誰かベンチにいる？
って、あいつは…。

「こんな所で何してんだ、兵藤？」
「…アーシアに、大空？」
「…イッセーさん？」

そこにいたのはアーシアが気にしてやまない兵藤がいた。
この時間はまだ学校だが、俺と同じでサボりか？

「え？えぇ！？なんで、なんでアーシア達がココにいんの！？――っ！」

「んな急に立ち上がんな。昨日の傷に響くぞ？」

よほど俺達の登場に驚いたのか兵藤は急に立ち上がり、苦痛の表情で歯を食いしばる。
制服の下に隠れているから分からないが、昨日の傷はまだ治っていないらしい。

悪魔と言えど治癒能力は高くないのか？
いや、銃で撃たれたっていうのに昨日の今日で歩けるんだから、それはすでに驚異的な治癒スピードだ。

く～～～

…ん？
なんだ、今の音。

もしかしてと思い、後ろの方を向くと顔を赤くしてローブを深々と被るアーシアがいた。
どうやら心配していた兵藤に会えて緊張の糸が緩まったらしい。

まったく、正直な体だ――

ぐ〜〜〜

…こいつもか。
今度は兵藤の方から腹の音が聞こえて来て、当の本人も気まずそうな顔をしている。
とても話す雰囲気じゃないな、こりゃ。

「…とりあえず、昼飯にするか」

俺の提案を素直に受ける2人。
悪魔でも腹は減るんだな。

「あー、遊びすぎたな」

「は、はい…、少し疲れました…」

「……」

つ、疲れた…。
昼飯を食いに行ったのはハンバーガーショップ。
そしてその後にゲーセンで遊びつくした。

別に楽しくなかったわけではない。むしろ楽しかったのだがそれ以上に疲れた。
なぜならどちらも俺にとって初体験の場所だったからだ。

人が密集する店内で俺がいると店にとって悪影響にしかならない。
だから外で食べる時はコンビニやスーパーで買ったパンなどを公園で食べたりしている。

緊張してほとんど話せず、兵藤に引っ張られるアーシアの後を付けていた。
…警官に会ってたら絶対俺だけ呼び止められただろう。

遊び疲れた俺達は昼に会った公園で一休みしている。
つーか、もう夕方じゃねぇか。早くしねぇとあいつ等が動きだしちまう。

「ととと。いたた…」

「イッセーさん、先日のケガまだ痛みます？」

「あ～、ちょっとだけね」

「…あの、ズボン、あげてもらってもいいですか？」

「あ、あぁ」

歩き続けた事で傷に響いたのか、躓く事が多くなった足をアーシアが気にかけて兵藤の足元にかがむ。

そして露わになった兵藤のふくらはぎに残る銃創に手を当てる。

すると兵藤の怪我を治した時と同じように、温かな緑色の光が放たれた。

その光に呼応するように銃創がみるみる消えて行く。

傷が完全に消えたのを確認したアーシアは光を止める。

「これでどうでしょうか？」

「おっ。おおっ！すげぇよ、アーシア！違和感がなくなったよ！痛みも全然ないぞ！」

「いつ見てもすげぇな、その力。まぁ、数回しか見た事無いが」

完全に治った事を主張するように兵藤は小走りやジャンプをしたりする。

少し大げさな感じがするが、それがあいつなりの励まし方なのだろう。

その結果アーシアが嬉しそうに微笑んでいるのだから成功と言えるな。

「すごいな、アーシアは。治療の力、すごい力だよ。…これって、神器（セイクリッド・ギア）だよね？」

ん、神器（セイクリッド・ギア）？

なんだそりゃ？

「はい。そうです」

「実は俺も神器（セイクリッド・ギア）持ってるんだ。大して役に立ってないけど。いまのところは」

「イッセーさんも神器(セイクリッド・ギア)持っているんですか？全然、気付きませんでした」

「…なぁ、話の腰を折るようなんだがいいか？神器(セイクリッド・ギア)って何だ？」

な、なんだよその顔は。

俺のこの質問に2人は目を見開いて来た。

こちとら全然説明されずに日常から追い出されたんだから知らない事が多すぎるんだよ。専門用語まで出て来たら置いてけぼりくらうぞ、俺。

「え、大空…。神器(セイクリッド・ギア)の事知らないのか？」

「知らねぇよ。悪魔の存在だって昨日知ったばっかだ」

「で、でも教会に住んでいるんですし、神器(セイクリッド・ギア)の存在くらいは…」

「知らねぇ。んな事、親父たちから一言も聞いた事ねぇし」

教えてもらう事無く死んでいった。

…俺のこの右手が原因で。

「えっと、そうですねぇ…。神器（セイクリッド・ギア）っていうのは特定の人に宿る、規格外の力を総称していいます。歴史に名を残した人の多くは何らかの神器（セイクリッド・ギア）を所持してたんですよ」

「んで、アーシアのが治癒の力で、俺のは…まだ分かんねぇや」

「分からない？」

「あぁ、俺も悪魔になったのは最近で神器が出て来たのはもっと最近。だからどういう物か分からねぇんだ。それに比べたら、アーシアの力はすごいよ。これって、人や動物、俺みたいな悪魔まで治せるんだね」

「そういや俺も腹に風穴開けられたっていうのに、傷一つ残らず治されたな。あの力はマジですごいわ」

俺達がアーシアの力に感心してそれぞれの感想を述べるが、当の本人は複雑な表情を浮かべる。

どうしたのか不思議に思って見ていると、アーシアがいきなり泣き出した。

って、えぇ！？

いやいや、なんで！？

ただ思った事を口にしただけで、別に俺も兵藤も悪い様な事を言った覚えはねぇぞ！？

その後、男2人がアタフタしながら咽(むせ)び泣く金髪美少女をベンチへと座らせて気持ちを落ち着かせる。兵藤がなんとかして泣き止ませようとしてアーシアを慰めるが、俺はそれをただ見つめていた。

…こんな時、俺は何て言えばいいんだ？

泣きじゃくる子供をあやす事も出来ない自分に腹が立つ。

普段1人でいたツケがこんな形で帰ってくるとは思わなかった。

しばらくして涙の勢いが納まり、俺達は安心する。

はぁ…、何かで『涙は女の武器』って聞いた事があるが、まさしくその通りだ。

喧嘩で名を馳せた俺がココまで体力を削られたんだ。女ってこえぇな。

「…2人共すいません、お見苦しい所を」

「いやいいよ、別に気にしてないし」

「ま、すいませんっていう言葉より、なんで泣いたのか教えてほしいな。何が原因だったのかさっぱりわからん」

「あ、それ俺も聞きたい。アーシア、もしよければ話してくんない？」

「……分かりました。じゃあ、まずはちょっとした昔話から入りますね」

奇妙な入りから入ったその話はアーシアの身の上話だった。
そしてそれは、『聖女』から『魔女』へと転落して行った少女の悲しい物語。

『悲しみ』があるから『楽しみ』がある。その逆も然り（後書き）

次回はアーシアの生い立ちについて書きます。

まぁ、原作より短めの文章でまとめるつもりです。

次回も早めに更新出来る様頑張ります。

では、また次回。

過ぎた力は孤独にさせられる（前書き）

少しばかり遅れました。
まぁ、待っている人なんていませんよね。
では、どうぞ。

過ぎた力は孤独にさせられる

欧州のある地方、そこに生まれてすぐ親に捨てられた少女がいた。少女は捨てられた先の教会兼孤児院でシスターとなり、他の孤児たちと共に育てられた。

彼女が8歳になった頃、人生の転機が訪れる。

負傷した子犬を見つけた彼女は治療をしようと手を差し伸べると、偶然『不思議な力』が働き子犬のケガを治してしまった。さらに偶然が重なり、これを見ていたカトリック教会の関係者が「奇跡の力だ！」と祭り立てる。

こうして『聖女』が生まれる事となる。

『聖女』の噂は瞬く間に広がり、教会は彼女を保護すると言う名目で『加護』と言う名の『治療』を行わせた。この事に関して少女は不満を感じた事はない、むしろ自分の力が役立てる事を嬉しく思っていた。

少女は神様からの贈り物に感謝するも、心の隅で少しさびしくも感じている。

なぜなら彼女の傍にはもう、心許せる友人が1人もいなくなったからだ。

みんな彼女に優しくしてくれる。

だがそれと同時に彼女の力を『異物』としても見ている事に彼女は

気付いていた。まるで『人を治療できる生物』と言う目だと。
そんな感情を押し殺したまま、彼女は治療を続ける。
彼女は自分より他人を優先する、優しい感情を持った人物なのだ。
だがその感情が彼女をさらに苦しませる事となる。
ある日、たまたまケガをしている悪魔を見つけた彼女は治療してしまった。
彼女の無類の愛は『教会の天敵』にまで向いてしまい、その光景を見ていた教会関係者は内部に報告した。この事実に彼女の力を知っていた者は全員、驚愕する。

『悪魔を治療できる力だと！？』
『そんな馬鹿な事があるはずがない！』
『治癒の力は神の加護を受けた者にしか効果を及ぼせないはずだ！』

治癒の力を持った者は世界各地に少なからずいる。
だが悪魔や堕天使にまで効果を及ぼす者は今まで1人もいなかった。
この事実に教会はすぐさま手のひらを返して来た。
悪魔も治癒できる、たったそれだけの事で裏に潜んでいた『異物』を見る目が表に現れ、呆気なくカトリックから追放される事となる。
こうして少女は勝手に『聖女』と崇(あが)められ、勝手に『魔女』と蔑(さげす)ま

れた。

「――――誰にも庇(かば)ってもらえずに生き場を失った私は、イッセーさん達が知っている『はぐれ悪魔祓い(エクソシスト)』の組織に拾われました」

「「……」」

俺と兵藤は何も言えなかった。
俺もそれなりにつらい事や苦しい事は経験したが、こいつになんて言葉をかけていいか分からずにただ聞く事しか出来ない。

「…きっと、私の祈りが足りなかったんです。これでも毎日欠かさずやってたんですけど、ほら、私、抜けている所がありますから。ハンバーガーだって、1人で買えないぐらいバカな子ですから」

アーシアは笑いながら涙をぬぐった。
…こいつに、なんて言葉をかけたらいいんだ？
『この力』が怖くて自分から孤独に走った俺はこいつに何が言えるんだ？

「これも試練なんです。私が全然ダメなシスターなので、こうやって修行を与えてくれるんです。今は我慢の時なんです」

また笑いながらアーシアは口を開く。
まるで自分に言い聞かせるかのように。

「お友達もいつかはたくさんできると思ってますよ。私、夢があるんです。お友達と一緒にお花を買ったり、本を買ったりして…、おしゃべりして…」

堪え切れなくなったのか、アーシアの口は笑う事が出来ずに歪む。
そしてぽろぽろと流れて行く涙。
我慢していた感情が一気に溢れだしたのだろう。

アーシアの『治癒の力』、神器(セイクリッド・ギア)って言ったか？
十中八九、俺の『この力』もそれに属するんだろうな。

おい、神。
またお前の仕業か！

いや、俺のはこの際どうだっていい。
今までの人生でお前に嫌われるような事をたくさんしてきたしな。

だがよ…。
こいつ、アーシアは救ってやれよ！お前は神（お前）を慕(した)う奴に手を差し伸べるんだろ！？じゃあ神器(セイクリッド・ギア)なんて余計なもんじゃなくて、『幸せ』を渡してやれ！！

俺が行きどころのない怒りを感じていると急に兵藤がアーシアの手を取り、まっすぐな目で答えた。

「アーシア、俺が友達になってやる。いや、俺も大空も、もうアーシアの友達だ！」

この言葉に、アーシアはきょとんとする。
つーか、俺も入ってるのか？兵藤はいいとして俺は止めておいた方が…。

「あ、悪魔だけど大丈夫。アーシアの命なんて取らないし、代価もいらない！気軽に遊びたい時に俺たちを呼べばいい！あ～、ケータイの番号も教えてやるから。ほら、大空も！」

「あ？いや、俺は――」

「…どうしてですか？」

断ろうとしたがちょうどアーシアの言葉にかぶってしまった。
くそ、断りにくい雰囲気になってきやがった…。

「どうしてもこうしてもあるもんか！今日1日俺達とアーシアは遊んだだろう？話しただろう？笑いあっただろう？なら、俺達はもう友達だ！悪魔だとか人間だとか、神様だとか関係ない！俺達は、友達だ！！」

…熱いな、こいつ。
他人との付き合いに冷えた俺とは正反対だ。
今わかった。アーシアの心を救い出せるのは兵藤（こいつ）だと。

「…それは悪魔の契約としてですか？」

「違うさ！俺達は本当の友達になるんだ！訳の分からない事は抜き！そういう事は無しだ！話したい時に話して、遊びたい時に遊んで、そうだ、買い物も今度付き合うよ！本だろうが花だろうが何度でも買いに行こう！　な？」

「その時はお前のオゴリな」

「え！？ちょ！」

「まさか女の子に優しい兵藤くんが女の子に勘定させるとは思えないな～」

「ぐっ…！それなら大空も払えよ！」

「払ってもアーシアの分だけだ！」

「男らしいけどケチ臭い！！」

今この場で俺がアーシアにしてやれる事は何もない。
ならせめて、この暗い雰囲気を少しでも明るくする事だけでもしよう。

どうせ俺がこいつ等を笑わせれるのは今回で最後だろうからな。

そんな俺らの会話の横でアーシアは口元を押さえてまた泣いている。
だけど、涙の意味がさっきまでと違う事は俺でも分かった。

「…イッセーさん、アスカさん。私、世間知らずです」

「これから俺達と一緒に町へ繰り出せばいい！」

「人間、3日もあればその場の環境に慣れるんだから気にすんな」

「…日本語だって、まだうまくしゃべれませんし、文化も分かりませんよ？」

「俺が教えてやるよ！ことわざまで話せるようにしてやらぁ！俺に任せろ！なんなら日本の文化遺産でも見て回ろうぜ！サムライ！スシ、ゲイシャだぞ！」

「俺達だってアーシアについて知らない事が多いんだから、互いに知って行けばいいだろ」

「…友達と何をしゃべっていいかも分かりません」

「今日1日、普通に話せたじゃないか。それでいいんだよ。俺達はもう友達として話していたんだ」

「…私と友達になってくれるんですか？」

「あぁ、これからもよろしくな、アーシア」

兵藤はアーシアの手を握り、満面の笑みで答えた。
…俺はその問いに何も言わず、ポケットからハンカチを取り出す。

「ほら、貸すから行って来い」

「え？あの、行って来いって、ドコにですか？」

「そこのトイレ。そこに鏡があるから顔直して来い。涙とかの汁で顔グッチャグチャだぞ」

「えぇ！？そ、そうなんですか！？」

「嬉しい時ぐらい、もうちょっとマシな笑顔になりたいだろ？」

「…そうですね。じゃあ、行ってきます！」

ハンカチを受け取ったアーシアは小走りでトイレへと駆けて行く。
おし、ココからは男同士の話だ。
俺は少し真面目な顔をして兵藤と向き合った。

「兵藤、少しいいか？」

「なんだよ、急に改まって」

「率直に言う。アーシアをグレモリーの所に匿わせてくれ」

「…は、はぁ！？いきなり何言ってんだ、お前！？」

「落ち着け、ちゃんと説明してやるから」

想定外の事が多かったからか、兵藤の眉間にしわが寄る。
今にでも煙が出そうな頭が冷えるのを待ち、頃合いを見て話しだす。

…けっこう時間がかかったな。
こいつ、見た目通り頭の中も馬鹿なのかもしれない。

「正直言って、アーシアを堕天使の奴らと一緒にいさせても悪影響しか受けない。だけど逃がそうにも俺には何の伝手(つて)もない。だがお前にはあるだろ」

「…部長の事か？」

「あぁ。堕天使とか悪魔とかの情報に富んでいる奴なんてそうそういないしな」

「て言うか、なんで俺らの所なんだ？」

「どこかの教会で引き取れたんならそれに越した事はなかったんだが、さっきの話でその線は完全に切れた。それなら、敵側の悪魔さ

んに守ってもらった方がまだ効率的だ。なんとかならないか？」

「う～ん、難しいな～。これでも俺、もう教会に関わるなって言われてるんだよな～」

「ふむ…、それならグレモリーには『治癒』の話でもしてやれ。あの力が手元に置けるなら『悪魔』にとって悪い話じゃない」

ガッ！

俺の言葉に兵藤が胸倉を掴んで来た。

…とは言っても、身長差のせいで何の意味も成していない。

やっぱり此処で食いついて来たか。

こいつと一緒にいた時間はほんの少しだが、こいつもアーシアに負けじ劣らずな性格だと理解している。

「…おい、お前まさか、アーシアをあの話と同じ『目』で見てんのか！？」

「んな訳あるか。俺はグレモリーの事なんか噂と悪魔って事実しか知らねぇんだよ。だからそういう風に判断しただけだ。アーシアは『ただの優しい女の子』としか見てねぇよ」

「…そうか、…ごめん」

そう言って兵藤の手から力が抜けて行く。
別にこれくらいで謝らなくてもいいんだがな。

俺みたいな『親殺し』に比べたら、アーシアは普通の女の子にしか見えん。
アーシアも兵藤も、俺にとっちゃ眩し過ぎるんだよ。

完全に兵藤の手が離れた所でアーシアがトイレから出て来た。
涙の痕は残っているが、さっきまでのグチャグチャした顔よりか数段マシだ。

さて、俺も大詰めに入るか。

「俺が出来んのはアーシアをお前の所まで届ける事。その後はお前の番だ」

「俺の…？」

「あぁ。たまにフォローくらいはしてやるが、これからはお前がアーシアを守ってくれ。頼む」

アーシアの目がある為、頭は下げないが代わりに目で語りかける。
俺の想いを受け取った兵藤は真剣な眼差しで頷いた後、屈託のない笑顔で約束して来た。

「任せろ！俺がアーシアを守る！！」

「無理よ」

兵藤の誓いはいきなり現れた第三者によって瞬時に否定される。

っ！？この嫌な感じ、まさか！！

嫌な気配を感じて即座に後ろを振り返ると、真っ黒な翼と髪を棚引(たなび)かせた堕天使がいた。

過ぎた力は孤独にさせられる（後書き）

前半ほとんど同じでしたね。

て言うか読み直して思ったけど、この小説って原作とプロフ見ないと何言ってるか分からないですよね。すんごい今更だけどもう変えるの無理っぽいからこのまま進めるか…。

では、また次回。

守られる悔しさ（前書き）

最近忙しくてあまり書けませんでしたが、続きです。
と言ってもあまり物語で変動はありません。

はよ進めや。

では、どうぞ。

守られる悔しさ

おいおいおい、なんだよこのベタな展開。
遊び呆けてアーシアを逃がすのをグズグズと先延ばしにしていた俺が悪いんだが、まだ夜にもなってないのに追手が来るとはな。

しかも相手は気味悪い堕天使様じゃないですか。
たしかレイナーレって名前だっけ？

記憶の中にある名前を探り当てたが、俺の横で聞き覚えのない名前を口にした奴がいる。

「ゆ、夕麻ちゃん……？」

「なんだ、兵藤。知り合いだったのか？」

「…というか俺の元カノ。さらに言えば俺を殺した張本人」

「…生きてんじゃん」

「俺は転生悪魔なんだよ。さっき言ったろ。『悪魔になったのは最近』だって」

…つーことはなんだ？

兵藤は元カノの堕天使に殺されて、悪魔であるグレモリーに転生されて悪魔になったってことか？聞ける余裕が出来たら聞いてみっか。
今はそんな事聞けそうにないしな。

「へぇ。悪魔になって生き返ったんだ。嘘、最悪じゃないの」

なんせ目の前には人殺しの堕天使がいるんだからな。
クスクスと笑みを絶やさないが、見てて反吐が出そうだ。
俺は1歩前に出てレイナーレの目を引かせる。
せめてアーシアが逃げる隙を作れれば…。

「ところでレイナーレさん、何かあったのか？夕飯の買い物の途中なんだが」

「黙りなさいよ『親殺し』。いつも甘やかしてるからって調子に乗らない事ね」

「「え！？」」

っ！！？
こいつ、今何て言いやがった！？
兵藤とアーシアもさっきの言葉が聞こえたのか、目を見開いて唖然としている。
今すぐにでも動きたい衝動を抑えながら、俺は静かに理由を聞いた。

「…おい、何でお前がそれを知ってる」

「何も調べずにあの教会を乗っ取ったとでも思った？なんの信仰性もない教会よりも、元々神に愛されていた場所を使う方が儀式を運営しやすいの。あんたが信仰心の厚い両親を殺したおかげであの教会は堕ちる所まで落ちたわ。まぁ、どんな方法で殺したか知らないし、興味もない――」

ヒュッ

ドガッ！！

くそっ！避けられたか！！
俺は思いっきり振り下ろした踵（かかと）に持っていった重心をつま先へと素早く移し、即座に次の攻撃を繰り出した。
さっきの踵落としで砕けたアスファルトをヤツの眼に向かって全力で蹴る。
今まで相手してきた不良なら直撃したり怯んだりしたが、あいつは

余裕の表情で簡単に避けた。

「『待て』も出来ないなんて、見た目通りの駄犬ね。そのキレた衝動で親も殺しちゃったの？」

「てめぇが…、てめぇなんかが！親父達の話をすんじゃねぇえええええ！！！」

もういい、こいつは殺す！
右拳を固く握りしめ、再び堕天使に歯向かう。
この力が効こうが効かまいが関係ねぇ！！
効いたら儲けもん、効かなかったら死ぬまで殴る！！！
だけどそんな俺の甘い考えはすぐに未知の力で抑えつけられた。

ドスッ！　ドスッ！！

「！！？　っがぁああっぐっぐぎ…」

「あら、良い悲鳴♪でももっと声を荒げてもいいのよ」

「大空！！」

「アスカさん！？」

何が起こったのか分からず足元から来た激痛に耐えた俺は痛みの先を見てみる。
そこには光る槍のような物が俺の両足に深々と刺さっていた。
この痛み、フリードの時と同じ！？

「あなたにはもう用がないから出しゃばらないで。じゃあね」

それだけ言うと俺にはもう目もくれずに、ヤツは後ろの兵藤達の許へと進んでいく。

くそ、この槍全然抜けねぇし、熱い！
なんなんだよ、これは！？

痛みに耐える傍らで兵藤達の方を見ると、兵藤が無言でアーシアとレイナーレの間に入って壁になっていた。

「どきなさい、汚らしい下級悪魔が。用があるのはアーシアだけ。早く帰って来なさい」

「あんな事言われてるけど、アーシアはどうしたい？」
「…嫌です。私、あなた達の所にはもう戻りたくありません。…それに、あなた達は私を……」

兵藤の問いにアーシアは嫌悪の言葉をはっきりと示す。
だけどあの表情、まだ他にも何か理由がありそうだ。
さっきあいつが言っていた『儀式』ってヤツか…？

「そんな事言わないでちょうだい、アーシア。あなたの神器（セイクリッド・ギア）は私達の計画に必要なのよ。ね、私と一緒に帰りましょう。これでもかなり探したのよ？あまり迷惑をかけないでちょうだい」

さらに詰め寄るレイナーレに対して震えながら兵藤の陰に隠れるアーシア。
これを見ていた兵藤は何を思ったのか、左腕を力強く掲げた。
おい、こんな時にふざけてんじゃねぇ！

「せ、セイクリッド・ギア！」

兵藤が大声で叫ぶと、その言葉に呼応して左腕が光り手の甲に宝石が埋め込まれている赤い籠手が出現した。

すげぇ！
あれも神器（セイクリッド・ギア）なのか！？

俺の関心もつかの間、兵藤はその籠手を前に突き出しながら虚勢を張る。

「待てよ。嫌がっているだろう？ゆう、いや、レイナーレさんよ、あんた、この子を連れて帰ってどうするつもりだ？」

「下級悪魔、私の名前を呼ぶな。名が汚れる。あなたには関係ないからさっさと主の許に帰りなさい。だけど少しだけ気分が良いからある事を教えてあげる」

「…なんだよ」

「あなたを殺した理由」

その言葉に兵藤の目が力強く開かれ、眉がつり上がる。
そんな反応を見せるも、レイナーレは自分の言いたい事だけベラベラと話した。

「上の方々にあなたの神器(セイクリッド・ギア)が危険だからと以前命を受けたわけだけれど、どうやら、上の方々の見当違いだったようね。フフフ」

「…何がおかしいんだ？」

「あなたの神器(セイクリッド・ギア)、ありふれたもののひとつなのよ。『龍の手(トウワイス・クリティカル)』と呼ばれるモノ。所有者の力を一定時間、倍にする力を持っているけれど、あなたの力が倍になった所で全く怖くないわ。本当、下級悪魔にお似合いのシロモノね」

…マジかよ。

兵藤には悪いが、この闘いはあまりにも分が悪い。

この前のフリードと闘っている時に思ったが、兵藤の強さは素人に毛が生えた程度。

喧嘩で名を馳せた俺でも敵わない奴に兵藤が太刀打ちできるわけがねぇ！！

加勢するために足の槍を抜こうとするが激痛が走るだけで全然抜けそうにない。

しかもそうこうしている内に兵藤が覚悟を決めた顔になりやがった。

よせ、やめろ！！

「神器（セイクリッド・ギア）！動きやがれ！俺の力を倍にしてくれんだろう！？動いて見せろ！」

『Ｂｏｏｓｔ！！』

兵藤の問いかけに答えた神器（セイクリッド・ギア）は宝玉を中心に光り、音声が発せられる。

いざ兵藤が飛びかかろうとした瞬間、アイツの腹にも光の槍が突き刺された。

ズンッ

肉を貫いた重い音は俺の耳にも届いた。

一瞬、目の前の光景が止まったかのように見えたがアイツの登場で時間が戻って行く。

アーシアが急いで兵藤の腹部を治療しているからだ。

彼女の手から発せられた緑の光は槍を徐々に小さくさせ、次第に消えていく。

この様子を見ていたレイナーレがさらに口を開く。

「アーシア。その悪魔とあの駄犬を殺されたくなかったら、私と共

に戻りなさい。あなたの神器（セイクリッド・ギア）は我々の計画に必要なのよ。その力、『聖母の微笑（トワイライト・ヒーリング）』はそこの下級悪魔くんの神器（セイクリッド・ギア）と違って希少な神器（セイクリッド・ギア）なの。応じないのなら、２匹とも殺すしかないわ」

レイナーレから冷酷な啓示を言い渡される。
しかもわざわざ２匹とか。
完全に見下してやがるな、このアマ。

「う、うるせぇ！お、お前なんか――」

「わかりました」

兵藤の言葉を遮ったアーシアは堕天使の提示を受け入れた。

「「アーシア！？」」

「イッセーさん、今日は１日ありがとうございました。本当に楽しかったです」

ケガを治したアーシアは兵藤に満面の笑みを送り、今度は俺の方にやって来た。
そしてすぐに膝をつくと俺の足に例の光を当てる。
…痛みが、やわらいでいく。
本当に不思議な力だ。

「アスカさん、短かったですけど色々教えてくれてありがとうございました。お兄ちゃんが出来たみたいで嬉しかったです」

そう言って俺にも笑みを向けるが、どこかぎこちない。
程無くして治療が終わったアーシアはレイナーレの許に進み出す。
俺もその後に続いて1歩踏みだすが、足に妙な感覚が走った。
傷は癒えても、違和感は残るのか？
でも腹を治してもらった時はそんな事無かったよな？

「いい子ね、アーシア。それでいいのよ。問題ないわ。今日の儀式であなたの苦悩は消え去るのだから」
「おい！さっきから何なんだよ。その儀式って言うのは」
「あぁ、そうだったわ」

ポン

レイナーレは何かを思い出したかのような表情を取ると、俺の体を軽く押した。
敵意も何もない、ただの接触。

っ！やばい！！

俺にとって1番のダメージはただの触れ合い。
その『ただの触れ合い』が原因で両親を殺してしまった。
その事が未だに忘れられず、トラウマとして体に刻まれている。

勘ぐられないように体中の筋肉を硬直させ、いつもの慣れた構えをとった。

戦闘ではなくただの威嚇として取った行動。
だがこの行動が決定的なミスを犯す事となった。

レイナーレは俺の事など見向きもせず、アーシアを脇に抱えながら黒い翼で悠然と飛んでいる。

「あはははは！なにビビって構えてるの？もうあなたに用はないから突き放しただけよ」

「なに？」

「これから行う儀式、あなた絶対邪魔するもの。それなら最初からいない方がいいでしょ」

おい、お前等教会で何しようとしてんだよ！？
こうなったらアーシアだけでも呼び戻すしかない！
兵藤も俺と同じ気持ちだったのか、アイツの方が先に叫んだ。

「アーシア！待てよ！俺達友達だろう！」

「さっさと降りて来い！受け止めてやる！」

「2人とも、こんな私と友達になってくれて本当にありがとうございます。…さようなら」

「この子のおかげで命拾いしたわね。次に邪魔したら、どっちが来ようと本当に殺すわ。じゃあね、イッセーくん」

最後に兵藤の名前を呼んだ堕天使は嘲笑と共にその場から飛び去る。
アーシアの別れの言葉はあまりにも短く、あまりにも率直なモノだった。

俺達はそんな言葉欲しくない。
この気持ちを伝えようにもアーシアはもう堕天使に連れ攫われてし

まった。
残ったのは俺達2人に黒い羽、それと路面で転がっているゲーセンで兵藤に取ってもらったアーシアのぬいぐるみ。
この事態に耐えきれなかったのか、膝をついた兵藤は何度も何度も拳をアスファルトに叩きこんだ。

「アーシア…、アーシアアアァァァァァァッ！！！」

『アーシアを守る』と言った兵藤。
それが何の抵抗も出来ずに破られ、反対にアーシアに守られてしまったのが相当悔しかったのかアイツはしばらく空に向かって叫んでいた。

悔しいか、兵藤…。
俺もだよ…！

勝手にアーシアを連れだしたくせに、最後はアイツを悲しませるような事をさせちまった。
全部俺の勝手が原因で生まれた結果。
なら、これからやる事も俺の勝手だ！！

ドンッ！！

さっきの行動で硬直した体をほぐすために、心臓を思いっきり殴る。
これから思う存分暴れる為に、再度オレは心臓を殴った。

守られる悔しさ（後書き）

次回はやっと主人公がグレモリー一家と話す時がやってきます。

長かったなぁ…。

では、また次回。

ぶつかり合う思い（前書き）

いつの間にやら1週間以上更新してないという体たらく。
さらには新作作るという無計画っぷリ。

何考えてんだろう、自分…。

では、どうぞ。

ぶつかり合う思い

パン！

うす暗い部室の中で乾いた音が響き渡る。
原因はグレモリーに平手打ちされた兵藤の頬から発せられた音だ。
今俺は旧校舎にある教室、『オカルト研究部』の部室にいる。
『もしかしたら力になってくれるかもしれない』と言われて黙って兵藤の後を付いて来たんだが、こいつらいつもこんな所にいたのか。
埃っぽいし湿気が多い。掃除したい…。

「何度言ったらわかるの？ダメなものはダメよ。あのシスターの救出は認められないわ」

おっと、話がそれた。

さっき兵藤がグレモリーに教会に行く事を提案したが結果は予想通り、Ｎｏである。
前回兵藤が散々な目に会ったからか、相当険しい顔で拒否している。
やっぱり神の加護をもう受けてないとはいえ、悪魔にとって教会は危険なのか？

「なら、俺と大空だけでも行きます。やっぱり儀式ってのが気になりますし、堕天使が裏で何かするに決まってます。アーシアの身に危険が及ばない保証なんてどこにもありませんから」

「あなたは本当にバカなの？行けば確実に殺されるわ。もう生き返る事は出来ないのよ？それが分かっているの？」

冷静に振る舞いながら必死に兵藤を諭す。
しかもちゃんと正論を通しているから反論の余地もない。どうしても行かせたくないようだ。

「あなたの行動が私や他の部員にも多大な影響を及ぼすのよ！あなたはグレモリー眷属の悪魔なの！それを自覚しなさい！」

「では、俺を眷属から外してください。俺個人であの教会へ乗り込みます」

「そんなこと出来るはず無いでしょう！あなたはどうして分かってくれないの！？」

どうしても譲らない兵藤にグレモリーがついに激昂する。

…この前会った時も思ったが、こいつ結構感情的なんだな。行かせたくない気持ちがヒシヒシと伝わってくる。

まぁ、俺には関係ない話だが。

「俺はアーシア・アルジェントと友達になりました。アーシアは大事な友達です。俺は友達を見捨てられません！」

「…それはご立派ね。そういう事を面と向かって言えるのは凄い事だと思うわ。それでもこれとそれは別よ。あなたが考えている以上に悪魔と堕天使の関係は簡単じゃないの。何百年、何千年と睨み合って来たのよ。隙を見せれば殺されるわ。彼等は敵なのだから」

「敵を消し飛ばすのがグレモリー眷属じゃなかったんですか？」

「「……」」

お互い思うように行かないからか目に力がこもる。

2人の視線の先にいない俺でさえそれが伝わってくるほどに。

「あの子は元々神側の者。私達とは根底から相容(あいい)れない存在なの。いくら堕天使の許へ下ったとしても私達悪魔と敵同士である事は変わらないわ」

「アーシアは敵じゃないです！」

「だとしても私にとっては関係ない存在だわ。イッセー、彼女の事は忘れなさい」

兵藤が声を荒げるものの、グレモリーも一向に手を引かない。
グレモリーがどんな立場にいるかなんて俺には分からないが、あいつにも譲れない信念があるのだろう。
だがそんな険悪な状況で黒髪美人がそそくさとグレモリーに近付いて耳打ちする。
何かあったのか？
グレモリーの顔がさっきよりも険しいモノへと変わった。

「大事な用事が出来たわ。私と朱乃（あけの）はこれから少し外に出るわね」

「――ッ！？ぶ、部長、まだ話は終わって――――」

「イッセー、あなたにいくつか話しておく事があるわ。まず、１つ。あなたは『兵士（ポーン）』を弱い駒だと思っているわね？どうなの？」

は？ポーン？
ポーンって、チェスの兵士の事か？何でいきなりチェスの話なんか

してるんだ？
俺のそんな疑問に答えてくれる者はおらず、兵藤はグレモリーの問いに首を縦に振って答えた。

「それは大きな間違いよ。『兵士』には他の駒にない特殊な力があるの。それが『プロモーション』よ」

プロモーション？
なに、ビデオでも撮影すんのか？

「実際のチェス同様、『兵士』は相手の陣地の最深部へ赴いた時、昇格する事が出来るの。『王（キング）』以外の全ての駒に変化する事が可能なのよ。イッセー、あなたは私が『敵の陣地』と認めた場所の１番重要な所へ足を踏み入れた時、『王』以外の駒に変ずる事が出来るの」

へ～、なるほど。
言ってみれば将棋の『成り』みたいなモノか。チェスにもあったんだな。
…だけどこれ、何か意味があるのか？

「あなたは悪魔になって日が浅いから最強の駒である『女王（クイーン）』へのプロモーションは負担がかかって、現時点では無理でしょう。けれど、それ以外の駒なら変化出来る。心の中で強く『プロモーション』を願えば、あなたの能力に変化が訪れるわ」

…さっぱりだ。

悪魔内での専門用語なんだろうが、予備知識がないとさっぱり分からん。

後で兵藤に教えてもらうか？

「それともう１つ。神器（セイクリッド・ギア）について」

ピクッ

この言葉が耳に入った瞬間、自分でも驚くほど俺は集中した。

グレモリーはあくまで兵藤に話しているのだが、もしかしたらその話が俺の『あの力』にも関係してくるかもしれない。

グレモリーが兵藤の頬に優しく手を添えながら言う。

「イッセー、神器（セイクリッド・ギア）を使う際、これだけは覚えておいて。――想いなさい。神器（セイクリッド・ギア）は想いの力で動き出すの。そして、その力も決定するわ。あなたが悪魔でも、想いの力は消えない。その力が強ければ強いほど、神器（セイクリッド・ギア）は応えてくれるわ」

――――想いの力。

俺は『この力』を忌み嫌っていたが、その想いが反映してずっと右手に留まっていたのか？

俺がちゃんと向き合っていれば、親父達を殺さずに済んだのかもしれない…。

いや、落ち込んでいる場合じゃねぇ。

今はアーシアを助けることだけ考えろ。その他は後回しだ。

「最後にイッセー、絶対にこれだけは忘れない事。『兵士』でも『王』を取れるわ。これは、チェスの基本よ。それは悪魔の駒でも変わらない事実なの。あなたは、強くなれるわ」

そう言い残したグレモリーが黒髪美人、朱乃って言ったか？そいつと一緒に魔法陣に乗って消えて行った。

あの時の夜と同じように。
部室に残ったのは俺と兵藤、それにこの前会ったイケメンと少女だけ。
もう話してもいいだろう。

「兵藤、行くか？」
「おぅ」

短く返事した兵藤は俺と一緒に部屋を出ようとする。
だが俺達の行く手をイケメンが塞ぐ。
…チッ。ちょっと脅したくらいじゃ退きそうにねぇな、この目は。

「本当に、君達は行くのかい？」
「あぁ、行く。行かないといけない。アーシアは友達だからな。助けなくちゃならないんだ」
「それに、俺の家で勝手なことされちゃ困るんだよ。全員ぶっとばしてやる」
「…殺されるよ。いくら神器（セイクリッド・ギア）を持っていても、プロモーションを使

っても、エクソシストの集団と堕天使を相手に出来ない。ましてや君の方はただの人間じゃないか」

んな事わかってる。
エクソシストに堕天使、どちらも1回ずつ殺されそうになった。

「それでも行く。たとえ死んでもアーシアだけは逃がす」

「俺も行く。今まで売られたケンカは片っ端から買ってたからな。尻尾巻いて逃げるなんてありえねぇ」

まぁ、弱かった頃は何度か戦略的撤退を行った事もあったが、言わないでおこう。
この言葉を聞いたイケメンはさっきまでの真剣な顔から一変、柔らかい表情へと変えた。

「いい覚悟、と言いたい所だけど、やっぱり無謀だ。僕も行くよ」

「「なっ……」」

この返答には俺だけじゃなく、兵藤も驚いたようで言葉を一瞬失う。

そりゃそうだ。

さっきまでこいつ等の頭であるグレモリーが猛反対していた事にこのイケメンは加担しようとしているのだから。

「僕はアーシアさんをよく知らないけれど、イッセーくんは僕の仲間だ。部長はああ仰(おっしゃ)ったけど、僕はキミの意志を尊重したいと思う部分もある。それに個人的に堕天使や神父は好きじゃないんだ。憎いほどにね」

…ただの剣に優れたイケメンと思ってたが、全然違う。

こいつ、笑顔の奥にとんでもないモノ隠してやがる。こいつも過去に何かあったのかもな。

「部長も仰っていただろう？『私が敵の陣地と認めた場所の1番重要な所へ足を踏み入れた時、王以外の駒に変ずる事が出来るの』って。これって、遠まわしに『その教会をリアス・グレモリーの敵がいる相手陣地だと認めた』ってことだよね」

「「あっ」」

俺と兵藤はまたしても声をそろえた。

だけど俺のこの声、疑問に思っていた数ある点の内その１つの点がやっと線を結んだだけで、他にも分からない部分が多い。

予備知識が足りないからしょうがないんだが、話についていけないと正直つらい…。

「部長はキミに行ってもいいって遠まわしに認めてくれたんだよ。もちろん、それは僕にフォローをしろって意味合いだと思うけど。部長に何か考えがあるのだろうね。じゃなければ、キミを閉じ込めてでも止めると思うよ」

イケメンが苦笑しながら言っているけど、言ってみれば監禁だろ…。

だけど遠まわしとは言え、許可してくれる辺り甘いんだか天邪鬼（あまのじゃく）なんだか、よく分からないヤツだなぁ…。

そんな事を考えていると白髪の少女もやって来た。

…この学園の制服を着ているから一応高校生なんだろうが、ちっせぇな。俺の身長がデカい分、さらに小さく見える。

「…私も行きます」

「なっ、子猫ちゃん？」

「…3人だけでは不安です」

はぁっ！？

おいおいおい、大丈夫なのか！？

この部室にいるって事はこの子も悪魔なんだろうが、こんな子供が闘えるのか？

不安に思ってイケメンに聞いてみる。

「なぁ、何も知らない俺が言うのもなんだが、こいつ闘えるのか？」

「あぁ、そう言えば君は知らなかったね。彼女はこの中で1番の力持ちだよ。君なんかよりもずっと」

「はぁ？そんなわけ（ヒョイッ×2）……あるな。うん、分かったからそれをゆっくり置け。それは決して人に向かって投げるようなモノじゃないからな」

俺の問いにムカついたのか、少女は見るからに重たそうなソファと机を両手に1つずつ持って俺に向かって投げようとしていた。

俺も1つくらいならなんとかイケそうだが、あんなに軽々と2つ持

つのは無理だ。
なんとか怒りを鎮めてもらい、ソファと机を元の場所に置いてもらう。
ふぅ…、まだ救出に行く前だって言うのにすごく疲れた…。

「よし、一旦落ち着いた所でいっちょ救出作戦といきますか！待ってろ、アーシア」

俺の気も知らない元気な兵藤は作戦会議を提案する。
少し気晴らしに殴りたかったが、時間がもったいないため後回しにしておこう。

こうして俺達４人はアーシアの救出へと向かった。

ぶつかり合う思い（後書き）

前半主人公ほぼ空気。
この話で主人公が話したの４分の１も無いんじゃね？

…今後の活躍に期待！

では、また次回。

突撃！俺の教会！！（前書き）

題名は昔のテレビ番組風です。
リスペクトやオマージュなのでお気になさらず。

それでは、どうぞ。

突撃！俺の教会！！

辺りが暗くなり、街灯に明かりが点く時間帯へと変わった。
俺達４人は俺の家でもある教会が見える位置で身を隠している。
明りが点いているが、人の出入りが全くない。だけど確実に居る。
姿が見えないって言うのに堕天使やあの神父達の独特な気配がピリピリと伝わってくる。

「はい。これ、図面」

「お、用意いいな」

「まぁ、相手の陣地に攻め込む時のセオリーだよね」

にこやかな顔で言うイケメン。
…そんなセオリー聞いた事ねぇよ。思い返してみれば俺、ずっと行き当たりばったりなケンカばっかりしてたなぁ…。

「大空くん、いいかい？」

「ん、なんだ？」

「あの教会の事を1番よく知っているのは君だ。だからちょっと意見が聞きたくてね」

あぁ、そういう事か。
たしかに図面以外にも情報が欲しいだろうしな。
…うん、たぶんココだろう。

「こっちの宿舎は無視して聖堂に行った方が良いだろう。いつもココに引きこもって何かしてたようだし」

「やっぱりか…」

「木場、やっぱりってどういう事だ？」

話に付いて来れなかった兵藤がイケメンに問いかける。
つーかこのイケメン、木場って名前なのか。
ん？こいつ俺の名前知ってたよな。
言った覚えないんだが、こいつも俺の噂を知ってんのか？

「この手の『はぐれ悪魔祓い(エクソシスト)』の組織は決まって聖堂に細工を施しているんだ。聖堂の地下で怪しげな儀式を行うものなんだよ」

「地下？結婚式とかの道具が入った少し広めの物置ならあったが、まさかあいつら…」

「勝手に改築されているだろうね」

……はっはっは。
勝手に人の家占拠して、お次は無断改築ですか？
ふざけんなコラ！！形見に何してくれてんだ！！

「んで、結局なんで聖堂なんだ？」

「今まで敬っていた聖なる場所、そこで神を否定する行為をする事で、自己満足、神への冒涜に酔いしれるのさ。愛していたからこそ、捨てられたからこそ、憎悪の意味を込めてわざと聖堂の地下で邪悪な呪(まじな)いをするんだよ」

イカれてるっつーか、要は逆恨みじゃん。
俺も一時は『この力』の事で神様を憎んだりしたが、結局両親を殺したのは俺自身。その事実を受け止めて、せめてもの罪滅ぼしとし

てこの町に戻ってきた。

あの神父並に強そうなヤツはいなかったから少しは手加減してやろうと思ったが、事実をひねくれた目でしか見れない『甘ちゃん』共にそんな必要はないな。

今すぐにでも乗り込みたい気持ちを抑えながら、俺は木場に再度確認を取る。

「なぁ、このまま正面突破するのに反対はしないが、絶対見張りがいるぞ。さっきのチビッ子――――」

ガスッ！

「――っい！？…さっきの女子が力持ちだって分かったが、突破できる算段はあるのか？」

って～～～！！

このチビ、躊躇なくスネ狙ってきやがった！！しかも芯を当てて来たから尚更痛い。

悔しいがこいつにチビと言うのはよそう。

蹴り主体のスタイルで喧嘩している俺にとっては致命傷だ。

だけど怒りが治まらず、大人気なくチビににらみを利かせる。

「大空くん、こっち向いて。子猫ちゃんも大概にね」

「ちっ…」

「…はい」

木場に言われて渋々顔をもとの位置に戻す。
と言うかこのチビ、兵藤にも『子猫』って言われてたが、まさかそれが名前か？もしそうならピッタリ過ぎるだろ。何考えているか分からない所とか、チビな所とか。

「話を戻すけど、ちゃんと勝てる自信はあるよ。僕ら眷属悪魔には悪魔の身体能力の他に、特別な力を与えられているんだ」

「特別な力？」

「うん。僕達はチェスの駒と同じ称号を分け与えられていてそれぞれ違った能力を持っているんだ。ちなみに僕は『騎士（ナイト）』。能力は自身のスピード増加」

チェス？もしかして部室でグレモリーが話していたのはこの事か？
ちょっと聞いてみっか。

「兵藤、お前は確か『兵士（ポーン）』だったよな？」

「おぅ！能力についてはさっき部長が言ってた通りだ」

「やっぱりそうだったのか。んで、子猫…だったか？お前は？」

「…『戦車（ルーク）』。特性は腕力、防御力の増加」

「他にもあるけど今は省略させてもらうよ」

なるほど、部室でソファとかを軽々持ち上げたのはこの能力のおかげか。
改めて思うが、こいつらって本当に悪魔なんだな。見た目は普通の人間にしか見えないって言うのに。
だがこれだけの戦力があるなら突破する事は出来るだろう。
話の折り合いが着き、兵藤が勢いよく立ちあがる。

「よし！話もまとまったし、乗り込もうぜ！」

…助けたい気持ちが先行し過ぎて地に足がついて無い感じだが、たしかにココでのんびりしている暇はない。ココは素直に従ってやるか。

他の奴らも同じ思いだったらしく、俺達は行動を始めた。
目的地は決まっていた為、ただ一直線に聖堂を目指す。そして聖堂へのドアを開くといつも目にしていた馴染みの光景が目の前に入って来た。

いや、1部分だけ変わっている。

「あいつら…、やってくれるじゃねぇか…」

祭壇の後ろに飾ってある大きな十字架に磔(はりつけ)となった聖人の彫刻。その頭部が粉々に破壊されていた。神聖な雰囲気が一気に不気味さを増す事となった。

パチパチパチパチ

っ！来たか。
何処からともなく鳴り響く拍手。柱の物陰に潜む人影は気配で誰なのか即座に理解出来た。

白髪の神父、フリードだ。

「ご対面！再会だねぇ！感動的だねぇ！」

「あぁ。さっきから感動が止まらなくて胸がムカムカしてんだよ。さっさと消えろ」

「それはこちらも同じなんでね。やっとデカブツが消えて空気が澄んだと思ったら、悪魔さんを引き連れてノコノコやって来ましたよ。しかも見覚えのある奴らと。俺としては2度会う悪魔はいないって事になってんだけどさ！ほら、俺、メチャクチャ強いんで悪魔なんて初見でチョンパなわけですよ。1度あったらその場で解体！死体にキスしてグッドバイ！それが俺の生きる道でした。でも、お前等が邪魔したから俺のスタンスがハチャメチャ街道まっしぐら！ダメだよねぇ～。俺の人生設計を邪魔しちゃダメだよねぇ～！だからさ！ムカつくわけで！死ねと思うわけよ！つーか、死ねよ！このクソ悪魔のクズどもがよぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉッッ！」

…なげぇ。

1人で勝手にペチャクチャしゃべりだしたと思ったらいきなりコレだ。

喜怒哀楽がはっきりし過ぎだろ、こいつ。悪い意味で。

そんな事を考えていると、フリードはいきなり拳銃と光の剣を構え出した。

釣られて俺達も臨戦態勢をとる。

「てめぇら、アーシアたんを助けに来たんだろう？ハハハ！あんな悪魔も助けちゃうビッチな子を救うなんて悪魔様はなんて心が広いんでしょうか！てか、悪魔に魅入られている時点であのクソシスターは死んだ方がいいよね！」

「てめぇの戯言なんか知るか！」

「アーシアはどこだ！」

「ん～、そこの祭壇の下に地下への階段が隠されてございます。そこから儀式が行われている祭儀場へ行けますぞ」

…怪しいくらいにあっさり吐いたな。
場所を教えても通すつもりは一切ないってことか？大した自信だことで。

場所も聞き出せた俺達は本格的に戦闘態勢へと入る。
兵藤は赤い籠手を左手に現し、木場は鞘から剣を抜き、子猫は長椅子を担ぎ――って！？
それこの教会の物じゃねぇか！？

「おい子猫！ま――――――」

「……潰れて」

ブゥン！！

俺の制止の声は届かず、長椅子は放物線を描く事無くフリードへと吸い込まれる。
だがそれは直撃する事無く、光の剣で真っ二つにされてしまった。

つーか、これ以上教会壊すなよ！！
くそっ！こうなりゃもうヤケだ、こんちくしょー！！

ダッ！

子猫が作った隙を利用してフリードに接近した瞬間、俺のすぐ横で風が通り抜け、気が付くとその風は俺の目の前にいたフリードと鍔迫り合いをしていた。

なんとその風の正体は木場である。
『スピードの増加』って言ってたが速過ぎるだろ！！だけどこちらとしては都合がいい。

「木場！しゃがめ！！」

「っ！」

俺の声を素直に聞いた木場はフリードを力技で突き放すと同時にかがみ込んだ。
よし、ナイスだ！

俺は木場の背中を飛び越え、その勢いで飛び蹴りを放つ。
アドリブでやった割には中々いいタイミングで攻撃できたからか、フリードは剣と銃を交差して防ぐ事しか出来なかった。

「っ！？おいデカブツ！てめぇ靴の中に何か仕込んでんだろ！？この前と威力がダンチですっごく面倒なんですけど！」

「企業秘密だ、クソ神父」

前回はサンダルで、今回は鋼鉄入りの靴だしな。

軽く罵りながらも、俺と木場の連撃は終わらない。
俺が様々な角度から連続の蹴りを入れ、木場が反撃の出所を細かく捌(さばき)いて行く。

正直な話、フリードの動きはなんとか目で追う事が出来るがもう体が対応できる速度を優に超えている為、木場のサポートは俺にとって生命線でもある。

そう思いながら的確に急所を狙い蹴りを入れていたが、フリードは俺の脚を拳銃で、木場の剣を光の剣でしっかりと受け止めた。

……流石に片手で防ぐのは厳しいからか、腕が震えているな。

「ちっ…、耐えやがった」

「やるね。かなりキミ強いよ」

「アハハ！よってたかって僕チンをいじめないでくれる～？特にそっちのあんた、『騎士（ナイト）』か！あっちのデカいのと違って無駄のない動きだぜ。はぁ…、もう最高！これこれ。最近、こんなにいいバトルしてなくてさぁ！ウドの方は中途半端に強いから不完全燃焼で泣き寝入りしそうだったんですわ！！んー！んー！！ぶっ殺す！！！」

「じゃあ、僕も少しだけ本気を出そうかな。大空くん、離れて！」

ゾワッ！

いきなり走った寒気を素直に感じ、急いでその場から離れる。

一体なにをする気なんだ？

「喰らえ」

先程までの声音が嘘だったかと思えるほどの低い声。
初めて目の当たりにする迫力を感じた次の瞬間、木場の剣から黒い靄（もや）のようなものが出て来た。そしてそれはスグに剣全体を覆い隠す。

な、なんだありゃ？
あれも悪魔の能力なのか？

俺が戸惑って動けない間も変化は進み、靄は光の剣へと侵食して行く。
これには流石にフリードも驚きを隠せない。

「な、なんだよ、こりゃ！」

「――――『光喰剣（ホーリー・イレイザー）』、光を喰らう闇の剣さ」

「て、てめぇも神器持ちか（セイクリッド・ギア）！？」

あれも神器（セイクリッド・ギア）！？
しかも光を喰う剣って、モロ天使サイドにとって天敵じゃん。悪魔の武器として重宝されること間違いなしだろう。

闇は光を侵し、光は刃を形成できないほど弱々しい物へと変わった。
これを好機と見た兵藤が動き始める。

「神器（セイクリッド・ギア）！動けぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

『Ｂｏｏｓｔ！！』

「だからぁぁぁぁぁぁ！しゃらくさいんだってば！！」

これに気付いたフリードはすぐさま標的に狙いをつける。
だけど忘れてもらっちゃ困る。俺もいるんだぜ？
激情して気付かれない内にすばやくフリードの横に移動し、足の指先をヤツの脇にロックオンさせて力強く振り上げた。

「おらぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ゴキンッ！

「ぐッ…あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

おっしゃ、うまく外れた！肩の関節外したから、これでしばらく左

は動かせないだろう。
後はお前の仕事だ！

「最後に1発、入れてやれ！」
「おぉ！プロモーション、『戦車（ルーク）』！」
「しまっ――――げはっ！？」

兵藤の拳はフリードの顔面に深々と突き刺さり、打たれた本人はボールの様に飛んで壁へと激突して行った。うわ、土煙すご。
土煙で相手が見えない為、奇襲されても対処できるように注意を張らせておく。
…。
……。
……出てこないな。
やがて土煙は完全に消えたが、もうそこには誰もいなかった。
代わりに大きな穴が開いていて、血痕が外へと続いていた。

「これは、完全に逃げられたみたいだね」
「だな。まぁ、アイツをぶっ飛ばす予定もあったが本当の目的はア

ーシアの救出だ。足止めされた分急ごうぜ」

「…おー」

「おっしゃあ！今行くぞアーシア！！」

決意を新たに固めた俺達は地下の祭儀場へと急ぐ。

…だけど兵藤に子猫。俺はお前等に教会壊された事絶対に忘れないからな。

絶対にだ！！

ぶるっ…

「なんか寒気が…」

「…私もです」

「武者震いじゃね？気にすんな」

突撃！俺の教会！！（後書き）

原作沿いに進んでいるからか、大した変化はありませんね。
あるとすれば『悪魔の駒』の説明を少し入れた事と、フリードの告白がなくなった事くらいでしょうか。

いやだって、どうせ後から出て来るんだからその時に言ってもらおうかなと。捨て台詞は何回も言わず、1回で終わってほしいので。

では、また次回。

地下内の乱闘戦（前書き）

久しぶりの更新ですみません。
リアルが忙しかったりして執筆がまともに出来ませんでした。
更新速度が本格的にやばい…。
では、どうぞ。

地下内の乱闘戦

久しぶりに入った教会の物置は、もはや『物置』と言えるような場所では無かった。
拡張されていたり通路が出来ていたりと、増築され過ぎていてあの頃の面影が微塵もない。
くそ、無駄に良い出来だから壊すのがもったいないな…。
アーシアの臭いが分かると言う子猫の鼻を頼り…、になるかどうかは別として、奥へ進んで行くと少しデカい扉が現れた。

「あれか」

「おそらく、奥には堕天使とエクソシストの大群が存在すると思う。覚悟は良い？」

木場の問いかけに俺達は無言でうなずく。
んな事、出発する前からとっくに決まってんだよ。
俺達の意思を確認した木場はドアを開けようとする。だが、木場の手が触れる前にドアが勝手に開きだした。部屋の中にいたのは部屋を埋め尽くさんばかりの神父達。しかも全員、光の剣を持っている。

フリードほどの使い手はいないが、この数は面倒だ。
ちっ、分かってはいたがこっちの行動は全部筒抜けか。
随分と凝った演出するねぇ。

「いらっしゃい。悪魔の皆さん。1人違うのもいるけど」

部屋の奥から聞こえて来たレイナーレの声。
そしてその横には十字架に磔にされた金髪少女、アーシアの姿があった。

「アーシアァァ！」

「……イッセーさん？それに、アスカさんも？」

「まぁなんだ、迎えに来たってわけだ」

俺と兵藤がアーシアに声をかけた途端、彼女はボロボロと涙を流し始めた。
だが次の瞬間、アーシアの体が急に光り出したのだ。

「……あぁあ、いやあああぁぁあああぁぁあああぁぁあああぁぁあ！！」

「アーシア！？」

「感動の対面だけど、遅かったわね。今、儀式が終わった所よ」

「てめぇ！！」

俺は感情に任せて一直線に飛び出す。視界の端でイッセーも同じように走っていた。

だが俺達が駆け寄ろうとするのを阻むやつらが出て来た。

『邪魔はさせん！』

『悪魔め！滅してくれるわ！』

『彼女を生贄にする事で世界が平和になるのだ！』

生贄だと？ふざけんじゃねぇ！！

ごちゃごちゃと訳わかんねぇ事言い並べやがって――――

「――ウザってぇんだよぉぉぉぉぉぉ！！！」

『へぶっ！』

近付いて来た１人に強烈なハイキックをお見舞いしてやった。
そしてすかさずそいつの脚を掴みあげ――――

「おぉうらあぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

『『『『ぐえっ！？』』』』

思いっきり振り回して周りの神父達を巻き込んだ挙句、遠心力を利用して投げ飛ばした。
おし、打ち所が良かったのか１０人以上今ので気絶したようだ。

いつも多人数相手で喧嘩して来たんだ。
トーシロに毛が生えた程度の奴らに負けるかっての。

近付くヤツを吹き飛ばしながら周りを見てみると全員目立った外傷もなく闘っている。この様子ならあいつ等は放っておいてもいいな。

「いやあぁぁぁぁぁぁぁぁ……」

ちぃ！早く行かねぇといけねぇってのに！！
焦りを感じながら少しずつアーシアに近付いて行くが、それより前にアーシアの体から大きな光が飛び出して来た。それをレイナーレが掴む。

「これよ、これ！これこそ、私が長年欲していた力！神器（セイクリッド・ギア）！これさえあれば、私は愛をいただけるの！」

狂気に彩られた表情でその光をレイナーレは強く抱きしめた。
途端に眩い光が部屋中に埋め尽くされたが光はすぐに止み、光の中心にいたレイナーレの全身から緑色の光が発せられている。

一体なにがどうなってんだよ！？

「うふふ…、アハハハハハハ！ついに手に入れた！至高の力！これで、これで私は至高の堕天使になれる！私をバカにして来た者達を見返す事が出来るわ！」

なんか知らんがいきなりトチ狂いやがった…。
だけど注意が行ってない今ならアーシアを助けられる！

群がる奴らを吹き飛ばしながらアーシアに近付き、拘束具を外して行く。
全ての拘束具を解き、落ちそうになった所をタイミングよく着いた兵藤が受け止めた。

「ナイスキャッチ、兵藤！」

「……イ、イッセーさん…、アスカさん……」

「アーシア、迎えに来たよ」

「……はい」

なんとか意識はあるが生気が全然感じられない。
まさかあの光が奪われたからか？

「教えてあげる。神器（セイクリッド・ギア）を抜かれた者は死ぬしかないわ。その子、死ぬわよ」

「――っ！それならぱっぱと神器（セイクリッド・ギア）を返せ！」

「返すわけないじゃない。これを手に入れる為に私は上を騙してまでこの計画を進めたのよ？あなた達も殺して証拠は残さないわ」

「……くそ、夕麻ちゃんの姿が憎いぜ」

そう言えばこいつ、だます為とはいえ兵藤の元カノだったっけ？たしかにちょっとやりにくいだろうな。

そんな兵藤の言葉を聞いたレイナーレは浮かべていた冷笑を崩し、高笑いする。

「ふふふ、それなりに楽しかったわよ。あなたとの付き合いわ」

「…初めての彼女だったんだ」

「えぇ、見ていてとても初々しかったわ。女を知らない男の子はからかい甲斐があったわ」

「…大事にしようと思ったんだ」

「うふふ、大事にしてくれたわね。私が困った事なら、即座にフォローしてくれた。私を傷付けないように。でも、アレ全部私がわざとそういう風にしてたのよ？だって、慌てふためくあなたの顔が可笑しいんですもの」

…何だか雲行きがおかしい。

聞いているこちらもイライラして来た。

「…初デート、念入りにプランを考えたよ。絶対に良いデートにしようって思ったから」

「アハハハハ！そうね！とても王道なデートだったわ！おかげでとてもつまらなかったわよ！」

「…夕麻ちゃん」

「うふふ、あなたを夕暮れに殺そうって思ったから、その名前にしたの。素敵でしょ？ねぇ、イッセーくん」

「レイナーレエエェェェェェェェェェェェェェッッ！！」

「アハハハハ！腐ったクソガキが私の名前を気安く呼ぶんじゃないわよ！」

…初めて会った頃から気分が良い相手じゃなかったが、ココまでだったとわな。

正直言ってハラワタ煮え繰り返ってどうにかなりそうだ！

必死に気持ちを抑えていると木場がいきなり大声でこっちに叫んで来た。

「大空くん！今の兵藤くんじゃまともな判断も出来ない！兵藤くんとその子を連れて1度上にあがってくれ！僕達が道を開ける！さぁ、早く！」

「ちっ！しょうがねぇ、おら行くぞ！」

ガスッ！

「あでっ！？」

左腕を支えにしてアーシアをおぶる。

うっ！！……大丈夫、これくらいの接触なら、まだ大丈夫…。

アーシアと触れているという事実を意識しないようにして俺は兵藤を蹴って意識をこっちに向かせる。荒療治だが口で言うより効率が良い。

「何すんだ大空！俺はあいつを殴り飛ばさないと――」

「俺達は何しに来た！アイツを倒す事か？違うだろ！目的を見失うな！！」

「っ！…わりぃ」

「分かったんならさっさと行くぞ」

この大人数を相手にアーシアを守りながら闘うのは圧倒的に不利。
だが頭数の違いは最初から分かっていた為、教会に入る前から作戦を立てていた。

戦力的に考えれば一番弱いのは唯一人間の俺。
そんなヤツが居ても足手まといになる為、目的を達成したら俺がアーシアを連れ出すと決めていたのだ。

だがこの状況で足手まといがもう1人増えてしまい、そいつも俺が連れて行く事となった。

「子猫ちゃん、大空くん達の逃げ道を作るぞ！」

「…了解」

木場が闇の剣で、子猫が自慢の怪力で神父達をなぎ倒して行く。
2人のフォローもあって難なく扉まで付く事が出来た。2人の攻撃を掻い潜って近付いてきたヤツもいたが、俺が蹴ったり兵藤が殴ったりしてダメージもほとんどない。

「木場！子猫ちゃん！」
「先に行くんだ！ココは僕達で受け止める！」
「…早く逃げて」
「無駄な心配してんじゃねぇよ。あいつ等はお前なんかより何十倍も強い」
「でも！」
「何度も言わせんな！それともお前はあいつ等が簡単に死ぬと思ってんのか！？」

散々怒鳴られたせいでか分からないが、やっと決心がついた顔に戻る。
まったく、良いヤツだとは思うんだがこういう所は正直めんどくさいな。

「木場！子猫ちゃん！帰ったら、絶対俺の事はイッセーって呼べよ！絶対だぞ！俺たち、仲間だからな！」

兵藤はそれだけ告げると背を向けて走りだす。
俺も遅れないようにその背中を追って廊下を駆け抜けて行った。

地下内の乱闘戦（後書き）

ほとんど原作通り！
ギャグパートならまだしも、シリアスパートって変更しにくいんだよな～。もうしばらくこんな感じが続きますが、見守って下さるとうれしいです。

では、また次回。

悲しい別れ（前書き）

どうも、皆さん文化の日はどう過ごしましたか？
え、ワシ？休みと知らずに学校行きましたが何か問題でも？
教室暗くてさびしかった…。
では、どうぞ。

悲しい別れ

階段を上って聖堂に着き、すぐにアーシアを近くの長椅子に横たわせる。
くそっ、顔が真っ青な上に呼吸も薄い。このままじゃマジでやばいぞ。
横で兵藤が必死に叫んでいるけどあまり効果が見られない。何か俺にもできる事がないか探していると、いきなりアーシアが俺達の手を握って来た。

ゾクッ！

幸いにも握って来たのが左手だったから良かったものの、正直な話振り解きたかった。だけど必死にその衝動を抑える。アーシアの低い体温が、苦しそうな微笑みが俺をそうさせていた。

「…私、少しの間だけでも……友達が出来て……幸せでした……。…もし、生まれ変わったら、また友達になってくれますか……？」
「アホぬかせ。こちとら無宗教で輪廻転生は信じてねぇ。なるならちゃんと今世でなってやる」

「そうだぞアーシア！これから楽しい所に連れてってやる！カラオケだろ！ゲーセンも！そうだ、ボウリングも行こうぜ！他にもそうだ、アレだよ、アレ！ほら！」

「分かったから少し落ち着け」

…と、強がって見たが内心俺もこいつと同じ気持ちだ。泣けるものならボロボロと涙を流したい。叫べるのなら大声を喉が潰れるほど出したい。

だがこれから死ぬ者にそれはただの負担にしかならない。

直感的に、もうアーシアが助からない事を俺と兵藤は感じ取っていた。

「…きっと、この国で生まれて……イッセーさん達と同じ学校に行けたら……」

「行こうぜ！俺達の学校に来いよ！」

「…私の為に泣いてくれる……もう、何も……ありがとう……」

その言葉だけを残して、アーシアは完全に息を引き取った。

…ちっ、本当に短い期間だったって言うのにえらく情が移ってやがる。眼元に浮かんできた涙を俺は乱暴に拭き取った。
兵藤は大丈夫か？アイツはどう見ても感情で動くタイプ――――

「なぁ、神様！」

――――うぉう！？
こいつの事を気にかけて目線を向けるといきなり叫び声を上げた。
一瞬、奇行に走ったのかと思ったが、叫び散らすその姿が昔の自分と完全に重なっていた。

「神様、いるんだろう！？悪魔や天使がいるんだ、神様だっているんだよな！？見ているんだろう！？これを見ていたんだろう！？」

兵藤は必死に天井、いや、天に向かって叫ぶ。
だが返ってくるのは木霊した自身の声のみ。

「この子を連れて行かないでくれよ！頼む！頼みます！この子は何もしてないんだ！ただ、友達が欲しかっただけなんだよ！ずっと俺

が友達でいます！だから、頼むよ！この子にもっと笑って欲しいんだ！なぁ、頼むよ！神様！」

「…やめろ、兵藤」

「大空、なんで神様はこんな力は与えるくせに友達はくれないんだよ？俺が悪魔だからか？友達が悪魔だからナシなのか！？」

「…知らねぇよ。神が扱うのは秩序だけだ」

『命』を受けた者は生き、『命』を失った者は死ぬ。
この世の理（ことわり）と言える絶対の秩序を守っているのが神だと俺は思っている。そうしなければ『あの時』の出来事からずっと逃げる事になってしまうから。

「あら、まだこんな所にいたの？ノロマねぇ」

「…もう来やがったか」

「そう邪険しなくてもいいでしょ？それよりも見て。ココに来る途中、下で『騎士（ナイト）』の子にやられてしまった傷」

悠然と俺達の前に現れたレイナーレは徐に手を傷口に当てると、淡い緑色の光が傷を癒していく。おい、その力…。

「見て、素敵でしょう？どんなに傷付いても治ってしまう。神の加護を失った私たち堕天使にとってあの子の神器（セイクリッド・ギア）は素晴らしい贈り物だったわ」

やっぱり、アーシアの能力か！！
それはテメェみたいな薄汚い雌豚が使っていい物じゃねぇんだよ！
にらみを利かせるが当の相手はどこ吹く風で上機嫌に演説を続ける。

「堕天使を治療できる堕天使として、私の地位は約束されたようなもの。偉大なるアザゼル様、シェムハザ様、お二方の力となれるの！こんなに素敵な事は無いわ！あぁ、アザゼル様…。私の力を、私の力をあなた様の為に――」

「「知るかよ」」

タイミングを見計らったわけでもないのにハモった。同じタイミングで同じ言葉を。
この短い間で、兵藤の馬鹿っぽさが俺に少し移ったのか？だけど今はそんな事どうでもいい。

「堕天使だとか、神様だとか、悪魔だとか……。そんなものこの子には関係なかったんだ」

「周りにとやかく言われる事無く、静かに暮らせる事も出来た」

「無理ね。異質な神器（セイクリッド・ギア）を有した者はどこの世界でも組織でも爪弾（つまはじ）き者になるわ。強力な力を持っているが故。他者とは違う力を持っているが故。ほら、人間ってそういうの毛嫌いするでしょ？こんなに素敵な能力なのにね」

あぁ、そうさ。

俺達人間は本能的に異物を排除しようとする。それがまっとうな人としての判断だが、俺達はそれほど人間が出来ているわけじゃない。

「…なら俺が、俺達がアーシアの友達になってやる」

「その上で守ってみせる」

「アハハハハハ！無理よ！だって、死んじゃったじゃない！あなた達は守れなかったの！夕刻の時も、さっきも！その子を救えなかったのよ！本当におかしな子！おもしろいわ！」

「んな事、ちゃんと理解してんだよババア」

「だから許せないんだ。お前も、そして俺も――」

さっきのババア呼びが効いたのか、レイナーレの表情が消えた。もうすぐで状況が動き始める。俺は体の力を抜き、足のつま先1点に力を集中させた。

そして兵藤の声が、勝負開始の合図となった。

「返せよ……。アーシアを返せよぉぉぉぉぉぉっ！！」

『Ｄｒａｇｏｎ　ｂｏｏｓｔｅｒ！！』

兵藤の声に呼応してあいつの左手に嵌められた宝玉がまばゆい光を放つ。それと同時に兵藤は拳をレイナーレに突きつけ、俺はレイナーレの回避ルートに沿って蹴りを放った。

だが俺達の攻撃は簡単に避けられ、あまつさえこの闘いの戦力差についてまで説明して来た。このアマ、完全に舐めきってやがる。

だが実際、根性だけで乗り切れるほど易い相手ではない。こいつの力がフリードより上だといくら兵藤の力が神器で2倍に膨れても焼け石に水だ。

…仕方ねぇ、外すか。

俺はレイナーレの死角で静かに右手のグローブを外した。そして一

気に近付いて喉元を掴みかかる。

「あら、得意なキックじゃ――――――っ！？」

「ちっ！（避けられたか…）」

本能的に危険なものだと察知したのか、必死の形相で俺の攻撃を避けた。いや、俺の手を、って言った方が正確か？

安全圏へと移動したレイナーレは少し目を細めながら聞いて来た。

「…なんなの、その右手。凄く嫌な気配がするんだけど」

「知らねぇよ。こっちが聞きたいくらいだ！」

再び近付いて攻撃。今度は左ジャブや蹴りを織り交ぜてみたが全て避けられる。途中参加した兵藤が大ぶりな右ストレートを出した所でレイナーレは後退した。

…避けはするが用心を怠らない、ってか？めんどくせぇ。

「いいわ。その右手、あなたを殺した後に研究してお二方へのお土産にでもしようかしら」

「ノーサンキューだ、ボケ」

「ちっ、全然当たらねぇ…！」

うまく事が回らない事に兵藤が歯噛みする。横目で見てみると、籠手に付いている宝玉の文字が『？』になっている事から既に能力が2倍しているのだろう。それでもこんな状況じゃイラついて来るのも当たり前か。

「うふふ、それならサービスして状況をさらに悪化させてあげる」

次の瞬間、レイナーレの手に集束された3つの光が槍となって飛んで来た。

あの時と同じ攻撃！

咄嗟に避けようとしたが思った以上に速く、1本は俺の右肩に、2本は兵藤の両足に深々と突き刺さった。

ジュウウウウウウウウ

「ぐっ！？うぅぅ……」

「ぐぅぅぅぅあああああ！」

こなくそ！あの時とは比にならない痛みと熱だ。
アーシアの力を吸収して力が増したのか？骨は行ってないようだが
どうにも動かしづらい。横で兵藤が苦痛に耐えながらやりを抜こう
としているが、その手は焦げていた。

もしかしてこの光、悪魔には相当ダメージがデカいんじゃ？

「アハハハハ！その槍に悪魔が触れるなんて愚の骨頂よ！光は悪魔
にとって猛毒に等しいわ。触れるだけでたちまち身を焦がす。その
激痛は悪魔にとって最大級！あなたのような下級悪魔では――――」

「ぬがぁぁっぁぁぁぁぁぁ！」

堕天使の言う事なんか全然聞かず、奇声をあげながら兵藤は少しず
つ槍を抜いて行く。

なんなんだこいつは？
光が毒だっていうのは俺なんかよりもこいつ自身がよく知っている

はずなのに、なんで手を止めない。なんで立っていられるんだ。

「こんなもの！あの子が！アーシアが苦しんだものに比べたらなんだってんだよ！！」

ずりゅ　ずりゅ

嫌な音を立てながら引きぬかれた槍は空中で霧散する。槍が抜けた安堵や痛みに耐えきれなくなった事でその場に膝を突くが、未だに目の光は失っていない。

なんでこいつは、こんなにも熱いんだ。

そんな疑問が俺の頭に溢れかえり、こいつに比べたら肩の熱すらも微小なモノだと感じられた。

「…大したものね。下級悪魔の分際で堕天使の作った光の槍を抜いてしまうなんて。でも、無駄。私の光は派手さは無いけど、悪魔に対して殺傷能力が高いわ。もちろん多少効果が下がるけど人間にも有効よ。一つでも傷を負えば中級悪魔でもそう簡単には治らない。下等な存在のあなた達じゃ、ココまでが限界。ふふふ、光を甘く見ない事ね」

あ〜、長々としゃべんな。こちとら必死に槍抜いてんだから静かにしろ、傷に響く。
普通の得物なら止血の意味も込めて刺したままにしておくが、言ってみればこの槍は毒物。長々と体に刺しててていいモノではない。
んっ、ぐぅ！

ずりゅ

槍が抜けると同時に止められていた血液が溢れだす。気休めだが、急いでシャツの腕部分を破いて肩にきつく結んで止血した。

「あら、あなたも抜いたの？普通なら2人共死んでおかしくない頃合いなのに、本当に頑丈ね」

あぁ、確かにね。痛みには慣れているがこの焼ける感覚は初めてだ。体中が熱いが、そんな事よりもっと熱い男がいるからか不思議と正気を保っていた。
だがそんな男がいきなり何かを呟きだした。

「なぁ、大空。こういう時、神に頼むのかな？」

「あぁ？何を頼むのか知らんがやめとけ。神は気まぐれにしか奇跡を起こさない」

「確かにそうだな。さっきも俺の言葉聞いてくれなかったし、あんなに良い子のアーシアも全然助けてくれなかった。ハハハ、神様がどうしたってんだ」

「んじゃ魔王にでも頼んだらどうだ？お前悪魔なんだし魔王がいてもおかしくないだろ」

「そうか、そうだな。それじゃ魔王様、聞いてくれます？俺も一応悪魔なんで、ちょっと俺の願いだけでも聞いてくれませんか？」

そう確認を取った兵藤はブツブツと何かを言いだした。一体どうしたんだ？

「今から目の前のクソ堕天使を殴りたいんで邪魔が入らないようにしてください。ほら、乱入とかマジでごめんです。増援もいりません。俺がなんとかしますんで。あぁ、足も大丈夫です。今からなんとかして立ちます。だから、俺とこいつだけのガチンコをさせてください。いい場面なんです。怒りが凄まじくて、痛みもどうにか耐えられています。――――1発だけでいいんで。……殴らせて下さい」

「おい。それは俺が加入するのもダメなのか？」

「…あぁ」

「…わかった。アイツを殴るのはお前に預ける。だけどそれ以外は邪魔しない程度に勝手にやるからな」

「サンキュ…。それじゃ……、ふん！！」

気合を入れた兵藤は少しずつ腰を上げて立ち上がる。出血多量な上に痛みや疲労で体中ガクガク震えているってのに、よくやるよコイツは。

だけど見てるだけじゃ気が治まんねえし、俺もいっちょ気合を入れ直すか！

俺は心のふんどしを締め直す代わりに、右肩の布の結び目をきつく結び直した。

悲しい別れ（後書き）

中途半端な切り方だけど許して下さい。これ以上続けると2，3話分の長さになってしまうので、ココで切らせてもらいました。あと2話分くらいで1巻も終わりそうです。年内に終わるかな…？

では、また次回。

決着、教会の堕天使（前書き）

もうすぐ2ヶ月ですね（更新が止まって）
諦めた訳ではありません！ただリアルが忙しかっただけです！！久しぶりに描いたのでキャラがちょっとへんかもしれませんが気にしないでください。お願いだから。

では、どうぞ。

決着、教会の堕天使

あー、くそ。超いてぇ！！
気合入れてみたは良いが、一瞬でも力を抜けばすぐに崩れ落ちそうな状態だ。
つっても此処が正念場。手抜く訳にはいかねぇんだよ！！
隣で足ガクガクさせながら立ち上がる兵藤を横目に、俺は右腕を後ろに大きく引かせる。その際に右肩から指先にかけて力を入れておく。
肩から血が大量に出たり関節から変な音出ているが知ったことか。下手な小細工なしでこの１撃に全てを賭ける！

「な、何なのよあんた達！？この絶望的な状況でまだ立ち向かおうっていうの！？狂ってるわ！」
「そうかもな…。じゃなきゃ元とは言え、天使様を殺そうなんて思わねぇだろうし」
「俺の場合は元カノさんだよ。これってヤンデレに入る？先に殺されたの俺だけど」
「……下級悪魔と人間ごときがあの傷で動けるはずがない！全身を

内側から焦がしているのよ！？光を緩和する能力もない下級悪魔と脆弱な人間が耐えられるはずがないわ！！」

「こっちだって必死に耐えてんだよ。だがな……」

「てめぇへの怒りと憎悪がスゴくてさ、どうにかなっちゃいそうだ」

俺達の視線はただ1点に注がれる。だが今回の俺はあくまでサポート役。

隣にいる主役がどのタイミングで出るのかも集中する必要がある。

そう思って兵藤の方に耳を傾けると、またブツブツと呟きだした。

「なぁ、俺の神器（セイクリッド・ギア）さん。目の前のこいつを殴り飛ばすだけの力はあるんだろうな？トドメとシャレこもうぜ」

『Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ！！』

カッ！！

うおっ！？眩し！！

機械的な声と共に眩いばかりの光が隣から発生する。光っているのは兵藤の神器（セイクリッド・ギア）。堕天使の光と違って少し攻撃的に思えたが、何となく落ち着ける感じがした。

あの光が兵藤に自信を与えたのか、ギラギラとした目でレイナーレに近付いて行く。だけど足取りは遅いし傷口からは未だに血が流れている。

…俺の出番ももうそろそろか。

「…ありえない。何よ、コレ。どうして…、こんな事が…。その神器（ツド・ギア）は持ち主の力を倍にする『龍の手（トゥワイス・クリティカル）』でしょ？……なんで。あ、ありえないわ。どうして、あなたの力が私を超えているの……？この肌に伝わる魔力の波…、魔の波動は中級……、いえ、上級悪魔のそれ……」

ブツブツなに言ってんだ？

ターゲットにされているレイナーレはさっきまで余裕たっぷりで嫌味な笑みをしていたのに、今では顔面蒼白で後ずさっている。

イレギュラーが起こると混乱を起こすタイプか？

何にせよ、ビビってくれるのはありがたい。勝てる見込みが出てきた証拠だ。

「…俺が先に行く。その足じゃ走れないだろ？」

「…だな。んじゃ、よろしく頼むぜ」

「おう、お膳立ては任せろ！」

ドンッ！！

今まで溜めに溜めていた足のバネを全開にして俺は飛び出した。流石にモーションがデカいからレイナーレにも気付かれ、反撃される。

「こ、来ないで！」

ブゥン！ブゥン！！　　ザシュッ！ブシャ！！

降りだされた光の槍が俺の体を貫いて行く。

いっ！？———たくない！！

この右手を当てる事以外は考えるな！ただこのクソアマを掴む事だけを考えろ！！振りかぶっていた腕を砲身に変え、大砲のように右手を打ち出した。

「喰らえええええええ！」

「ひっ！？」

ブゥンッ！！

突き出した手が掴んだのはレイナーレではなく空気だった。

コンマ数秒の差で避けられた、…いや、飛んだのか。

瞬時に気配を察知して目線だけ上にやると翼を大きく広げたレイナーレがいた。その顔に余裕はなく、避けれた安堵や極度の緊張から変な笑みを浮かべている。

だけど俺が狙っていたのは、この瞬間だ！！

俺は足の速度を緩めることなく壁に突っ込み、そのまま壁を駆けあがる。

「え？……ウソッ！？」

「これなら飛んでようが関係ねぇ！だらあああぁぁぁあああぁぁあああぁぁあ！！！」

ガシッ！！

ヨッシャ！掴んだ！！ギリギリ掴めたのは足だが、遮る布はないから俺の力は発揮される。

後は効くかどうかだ…。

「放しなさい！この―（ガクンッ）―っ！？こ、これは何！？力が抜ける……！」

「お、効いてくれたか。賭けは俺の勝ちだな」

「くっ！な、何なのよコレは！？あなたも神器保有者なわけ！？」

「それかどうかは知らねぇが、どういう訳か俺の右手は変な『力』を持ってんだ。触った生物全てからエネルギーを吸い取る。ついでに言うと触った相手は時間が進む度に動きが鈍くなり、動けなくなると同時に―――死ぬ」

「―――――ッ！？」

おー、驚いてる驚いてる。

さっきは『最強の力を手に入れた！』とか言っていたのに今は死の瀬戸際。ムカつくヤツのこういう顔はいつ見ても愉快だなぁ、おい。

この事実を受け止めたくないのか、必死に翼をはためかせて逃げようとしているが高度は徐々に落ちて行っている。

「この、放しなさい！私はこんな所で、死ねないの！！」

「分かった、放してやるよ。んじゃ、後は頼むぜ、イッセー」

「え？」

ブゥゥン！！

体のひねりや筋肉をフルに使ってレイナーレを地面に向かって投げつける。その先にいるのは、赤い拳を握りしめたイッセー。

飛んで来た目標にタイミングを合わせ、鋭く力強い一撃を喰い込ませた。

「うおりゃあああぁぁぁあああぁぁあああっ！！」

ドゴォォン！！　ガッシャアアアァァァァァァン！！

炸裂した打撃音の後に大きな破砕音を立てて、堕天使は吹き飛ばされた。埃が舞っていて見えないが、音からして突き抜けただろうな。

ん？そう言えば俺、今空中に――――

ドスン！！

「あっ――！がっ――――！？」

――――すっかり忘れてた。着地に失敗した上、さっきレイナーレの槍に貫かれた箇所の痛みが今になってぶり帰って来やがったよ。

くそっ、止血するとこが増えたじゃねぇか。多量出血で朦朧とする頭でなんとか破った布を巻きつけ、イ……兵藤の元に行く。泣きながら笑うという、ちょっと狂った表情をしていたがその心境は分かる。

ムカつく奴を殴っても、一緒に笑ってくれる相手はもういない。

「お疲れ。堕天使を倒しちゃうなんてね」

「お、木場に子猫。って、あれ？」

「よー、遅ぇよ、色おと――――、部長！？どこから？」

マジでなんで居んの？

声がした方を振り返ってみたら一緒に乗り込んだ木場と子猫の隣に、なぜか別行動を取っていたはずのグレモリーとその付き添いの黒髪がいた。用事が終わって来たのか、それとも用事があるってのが嘘でずっと俺達を見ていたのか…。

「地下よ。用事が済んだから、魔法陣で此処へジャンプして来たの。教会にジャンプなんて初めてだから緊張したわ」

ジャンプ？あぁ、あの魔法陣で移動することか。
つーと、予想としては前者の方が当たってたわけだ。そんな事を考えていると子猫が群れから外れ、どこかへ歩いて行く。何してんだ、あいつ？
だが子猫の他にも別行動する奴がいて何故か俺の方に近付いて来た。

「あなたもお疲れ様。流されるように私達の騒動に巻き込まれた感じだったけど」

「ん、まぁ、変な居候を片付けてくれたのは助かったし、一応礼は言っとく。えっと…」

「姫島朱乃よ。これでも学校内じゃ結構有名なんですけど。赤鬼さん♪」

「…関わる事がないと思って覚えてなかったんだよ。『二大お姉さま』の姫島」

あぁ、ようやく思い出した。この人はグレモリーとよく一緒にいて生徒たちから『二大お姉さま』と称される良い方で有名な先輩だ。俺とは正反対。

「で、アンタは俺に何の用――つっ！」

「見ての通り治療です。この教会同様あなたもボロボロなんだから無理しないで」

「お、おぅ…。って、あああぁぁあああぁぁあぁああぁあああ！！？」

そうだ！ここ教会！！イコール俺の家！！！

真っ二つに切られたり大破している長椅子。顔面崩壊されたイエス像。戸のない玄関と化してしまった壁。そしてそこら中に散らばる血痕や鉄の臭い。

ハハハ……、ココまで来たらリフォームした方が良さそうだ。さらば俺の形見。だけどもう1つの形見、宿舎の方は守るから！！

「元気そうだけど治療しときますね。それよりも部長、この事は本当によろしいのですか？」

「……なんかヤバいんすか？」

「教会は神――もしくはそれに属する宗教の物だし、今回みたいに堕天使が所有している場合があるでしょ？そのケースだと、私達悪魔が教会をボロボロにすると後で他の刺客から付け狙われる事があるの。恨みと報復よ」

お礼参りなんてやっぱりドコでもあるんだな～。あれ、ちょっと待てよ？

「おいグレモリー。だがこの教会は堕ちて神がいないって堕天使は言ってたぞ？」

「えぇ、ココは神に捨てられた教会。堕天使が私利私欲で勝手にこの教会を使っただけだから相手の陣地に入って戦争を吹っかけた訳じゃない。こんなちっちゃい喧嘩なら年中起こっているわ。だからあなた達が気にする事はなに１つないのよ」

いや、ココ俺の教会…。
言っても無駄か。それに突っ込んでも体力使うだけだし今は休んでおこう。

だがその時、視界の端で子猫が何かを引きずっているのが見えた。
何かと思って見てみるとそれは気を失ってボロボロとなったレイナーレだった。

「部長。持ってきました」

「ありがとう、子猫。さて、起きてもらいましょうか。朱乃」

「はい」

呼ばれた姫島が手を上にかざすと、宙に水の塊が生まれた。なんつーか、もうこのくらいじゃ驚かなくなった自分がちょっと嫌だわ。

その水をかけてレイナーレを無理矢理起こすと、そこからグレモリー達による尋問が始まった。俺にとっては関係ないが、聞き流す程度に聞いておくか。

…。

……。

……。

つまりグレモリー達が別行動を取っていたのは協力者の堕天使達を始末する為だったと。その他にも兵藤の神器（セイクリッド・ギア）が本当はものすごく希少な物で、条件さえ満たせば神も殺せるほど強力なモノだったらしい。

あの兵藤にそんなすごいモノが付いてたのか。だけど教室でいつも

馬鹿でエロい事しかやってない印象があったからか、すごく想像しにくい。

ま、何はともあれこれで全て終わりそう――ん？

ゾワッとした寒気が背中を奔る。まだ、終わってない！？

急いでレイナーレの方を向くと、他の奴らから死角になっている右手で光の槍を作っていた。本能的にさっきまでのヤツとは違うと察知して行動に移す。

声に出すと気付かれる。

不審な動きをすれば気付かれる。

なら、気付かれる前に危険因子を潰す！

アクションを決定させ足に力を入れて駆け出し、近付いた所で問題が起こった。体力が尽きたのか分からないが、足がもつれて倒れ込んでしまったのだ。

幸いにも倒れ込んだ時にレイナーレを巻き込んで兵藤達に槍が飛ぶ事は無かった。

だけどその代わり、肥大化した光の槍が俺の心臓を焼き貫いていた。

今日、俺は死んだ。

決着、教会の堕天使（後書き）

面倒な説明はばっさりとカットしました。そこの詳細が知りたい方はぜひ『ハイスクールＤ×Ｄ』の購入を推奨します。（販促は基本）

１巻も次回で終わりです。頑張ります！

では、また次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2555v/

ハイスクールD×D　　蠍の毒

2011年12月30日02時46分発行